河社　上

イ 5
1285
1

河社 上

15
1285
1-2

河社上

河社しのにをりはへ夏神楽の事昔より此比の先達

さまざまにいひて事くさと成れど よく見そんし侍へし

貫之家集并又云天慶二年内のおほせ事とあり

夏かくら

河やしろしのにおりはへほす衣いかにほせはかなぬかひさらん

又云おなし年二月うちの御屏風のれうの哥

夏かくら

行水のうへにいはへる河やしろ河波たかくあそふなるかな

初の哥新古今集神祇部には延喜の御時月次屏風に

夏かくらの心をよみ侍りけるとて入れり時代にたかひ

門 へ 號 47 巻 1

門 イ 號 1285 巻 1

うたとし海ことに屏風の哥にて　神楽といへるハ哥か
いはれしによまてん夜もいへる此絃夜神楽絃乃に
とゝのはやしよみとよこよまてん皆六月祓の時乃事を
又右二首ともに六帖に就神楽の哥に載たり四季の
うちに六月の哥を皆ひとつけたること　類ありて
神楽に入れたとも先の哥とするはいへる式ニ年に
よまれて河やしろ夜もいへハやかて神楽なり
忠見か家集に郷の屏風に六月河原に神楽するにも讀る哥
これかれ此れんかまてはれはいとかうして神楽面白

これをかうし此祓をやりて　かくとよめるか河社といへ
延喜式六月大祓　祝詞に大宮ニ天神地祇にもろもろ
こ祓ひをうけ給ひ河に流し瀬織津比咩と
いふ神河に出て罷を大海原に持出て　祓戸の神は
かく此事に河原にまかつ事をするハ河をやして河
社といふなりしるしハ川中にかまへて此のかけに社のこと
川渡ひ神傍に立るをそ取つて祝詞なとして後に
神楽をもとし乃河辺にや志の年りまへ旧としてをとは
祓に榊をもて夜なと出て小竹にそり事に
此遊て麻の葉をとりて　浪によせこちの事なる

まはいつもさてあるまし わかつにはせてうたねかなき
らんとはよめるにや　新拾遺集に
思ふ事みなつきねとて麻の葉をきりにきりても祓へつるかな　和泉式部
此哥も同じく六月祓のよし　又貫之哥に
みそきする川の瀬見れはから衣ひもゆふくれに浪そ立ける
かく衣ひもゆふくれの御祓の哥と云はゝ続後撰
きぬよとせに成ぬやとおもはし　匡房卿六月祓の哥に
河やしろ秋をあすとやおもふらむ浪の音まて風の涼しき

此哥も貫之集によくいはれたりとみえて　さて河社の事
奥儀抄袖中抄六百番哥合に顕昭か説に河社を
よまれたる旅陣の絹幕よ　俊成卿の判詞にも古義
委しとみえたり　頼中将資盛朝臣家の哥合に
俊成卿の哥
五月雨は雲間もなきを河社いかに衣をしのにほすらん
同御河社百首
さゝ浪は岸波さえて此川河社くみかふれなとかな
此の哥は彼の河社とこそよくよくへかむ　此所せぬ歟し
定まへて侍るなり　続後撰集に

春霞志のに衣を掛けていくかほすらん天のかく山　後京極摂政

同集に続古今

ほしあへぬ衣をつふりか河社志のにおりかく月のしら

風雅集よ岩録に朱実

河社志のに浪こえ五月雨に衣かはくに潤やすらん

壬二集に　家隆にニ集六家集ともいふ

かはやしろおりしも衣のこして浪にかけたる風もたちけり

これは皆衣をほしたる宝字にて哥に

大井川かはしもふかの衣ほさぬありと衣ほしけん

これを持統天皇の御哥とさへ疑ひぬ衣ほすてふは

誤也のなかりしにめんやすへし　新続古今集に

前大僧正果当

よしのゝまさに涼敷の河社をね衣のうらをもほし

これは此歌の意なり拾遺新撰集云夜月まつとよむ

かりふ冬も出く月乃ゆふされやならん

よみ人しらず

かも川の流をすまて照る月を衣ほしてみえるらむあ

これまでゆふかけありし事もそつゝけはほし衣

ほしの衣すてゝは沙汰あるまじきなりとすべし

○肩抜鹿の事　匡房卿の哥にいはく
かく山のはゝかゝしたにうらとけてかたぬく鹿は妻こひなせそ
先代旧事紀第三云後命中臣祖天児屋命忌部
祖天太玉命而内抜天香山之牡鹿之肩抜
而取天香山之天波波迦而令占合之矣古事記説
同此古事記によりてよまれたる
天照太神乃天窟にこもりませる時のことく
然れとも此の事なく　神代には鹿の肩骨を
抜てうらなひけることの本也　和名集云
本草云櫻桃一名朱櫻　和名波々加　一名迩波佐久良

此木頌延喜式云凡年中御卜料波波迦木皮
仰大和國有封社令採進之これによまれし朱櫻
はあらぬかうらとけく　万葉集第十四云
・夜占問吾袖尓置露乎於公令視
跡取者消管
○此歌の六帖にはゆふとけてとありいふにかなへる
よくおほえすとおほつかなれとあれはよりて
うらといひてといふ風をかくもよまれけるにや
神代紀に天之瓊矛此瓊の字乃下に注していはく
瓊玉也此云努と見えたりとよめることよめるは

諾たり古事記に天沼矛と書せるもぬぼこと
よむべし
○同書に云 妍哉可愛少男歟 妍哉此云阿那而恵夜 可愛此云哀
これをあなにゑやえをとこをと 可愛を得乃字に
やはらかにあつかひ諾たりえをとこをとよむべし
吉の字をえとよむことはよしともとこれ乃意なり
とこはといふことをえとよむといふは古語
なり古事記 阿那迩夜志愛上袁登古袁 此下字以音下效此
これとおなじ詞なり 古事記の愛此字ハ音を借

くかなもて可愛此字をとかれ称しるそ
万葉に梅を烏梅柳を楊奈疑とかけり付乃
梅楊のごとし
○同書に云鞆これをもとともなり今たゞしと臨せん
此の書意を考るに八雲御抄にもたゞしもとあり
鞆を柄にまもの字と見れ
○下東云此人の陳報に羲和神光代華鑑映千
二丘二谷之間 此光代をてりと臨せ仮借の字
の意能くあらはれ万葉ぶりは此古字代ぶることと
よめり 卓如すなる心をよまそ亦らひとも見まし

○宮緑たかはしとよむへし　仁徳紀云十四年冬十一月為橋於猪甘津即号其処曰小橋　古事記下仁徳天皇紀云又作小橋江云々今小橋ハ天王寺の東北寅の方にあたる す丁許にあり南より流るゝ川ありて橋あり橋の東に猪飼野村あり猪甘津ハ是なり

猪飼ハ今の本猪飼ハ文乃次よく

こゝろつくよむへし

○崇峻紀に舂衣樹朴枝間とあるハ今のたか

ゑんれいきのまきふのえりくとのミはしと訓ぜら

れりきとりのくのきれまうでとよむへし　衣摺ハ

村名にて河内国渋川郡にありといへり物部

守屋連の家のありしといふ所也　平氏か和国志子

猪よみくゝり　此こふく乃事なり

○日本紀第二云天照太神高皇産霊尊勅

問諸神等曰昔遣天稚彦於葦原中国至

今所以久不来者蓋是国神有強禦之者

我亦遣而神問天彦逗留之所由也　思兼神

諸神等也　答曰可遣無名　雉鳩亦因遣無

名雉鳩之往就之　此雉亦鳩降来見粟

田豆田則留而不返是所謂雉頓使亦豆

見落居鳩是其像矣　此雉乃事古日本紀

まとてくしより　鳩とつかされし事　日本紀

ここ荒根神告ば草艶し

此ニ一字ば偏え省をきとあることあれも

偏の字備ノ字也　下ニ此見ばてありと

こゝも同じ備也

またみぬ事なり

○古事記中巻垂仁天皇段に山多和といへり
今も山里のものは山のひきゝてたわとよぶ
やう此処をいふことなりたわむといふなり
名つけられ

○日本紀に大織冠鎌足鎌子連とかける所あり
然るに子と書けるやまと藤原に欽明天皇の時
中臣連鎌子といふもありたり
昔は内大臣左右の大臣はよあるとは後世
後の世には天智紀に見えたる左右大臣を

次のことく記して次は内大臣を挙て百寮乃
上にありと以前は今とおなしくや
つゝく藤氏注記見え者萬路法師か傳に上記
なりしかなく系譜を出しかくいはく卜部姓
仲哀天皇御宇雷大臣天兒屋根人達十一世也
亀卜故始給卜部姓又常盤大連〈兒屋根十八世〉
奉捧中臣秡於欽明天皇於是改卜部姓而給
中臣姓天地天皇御宇至大織冠給藤原氏大
職冠御子意美麻呂又復中臣姓神護慶雲二
年意麿子清麿被拜中納言斯時加給大字又

改大中臣自清麿四世日良麿又給卜部姓自
尓以来代こ至今吉田家不改
今いふところは宮主と云職なりし卜
部の家乃職まつりごとは大中臣ハ天児屋
根命より傳はりて陽成の比姓卜部ハ雷大臣命
より傳はりて先祖大なる事ニ終まで凡家何およそ
中臣を首として忌部これに次げり延喜
式にも亦卜部を中臣の下に屬せしと
見えたり
律令命巻一末云凡灼亀占吉凶者是卜部之

執業之也 中臣のほかに卜部氏あり 昔より
明らかなり 既に天武天皇十三年に八姓
を定めて真人朝臣宿禰等の姓を諸氏に
賜ひける時中臣には朝臣宿禰を
賜ひしかれど卜部には姓もたまはらざりし
三代実録巻十七云貞観五年九月七日丙申
壹岐嶋石田郡人宮主從五位下卜部是雄神
祇權少史正七位上卜部業孝等賜姓伊伎宿
禰其先出自雷大臣命也
同巻二十一云貞観十四年夏四月廿四日癸亥

宮主従五位下兼行丹波権掾伊伎宿禰是雄
卒是雄者壹岐嶋人也本姓卜部改為伊伎
祖忍見足尼命始自神代供亀卜事厥後子
孫傳習祖業備於卜部是雄卜數之道尤究
其要者之中可謂独歩云々これにて卜部の
上祖は忍見足尼命にて雷大臣よりは前なり
所見れたる意をしられんとさらに考ふるに今乃安文
形器互見して神代は雷大臣より出と
いひなせは始祖を等くなれ　雷大臣を
思卑紀には見えぬ神功皇后紀には中臣烏賊

津臣（使主・イカツ）といふ人を雷審神者（サニハ）としるすとゆゑは
仲哀天皇の御時きはしへ神を崇め給ひ
烏賊津臣と雷と似たるて烏賊津使主と雷大臣と
いひなせしものにやされと神功紀に中臣烏賊津臣と
あれは混じて又大臣に誤れりその上彼
御時に武内宿禰大臣まてありければ雷
大臣とては別の人なるへし
又上古より中臣氏は中臣なくて卜部と臣は
卑しく卜部を中臣と誤る事を由ありけれはその
史書にはさも古説なるとかをすつ　なるさ事も

用ゆるは
文徳実録にいはく斉衡三年九月庚戌宮
主外従五位下卜部雄貞神祇少祐正六位
上業基等賜姓占部宿祢 これは卜部の文字
をも占部と改めて姓をも宿祢となされ
ハ卜部氏は婦なるなり 今の卜部ハ唐流なれハ
卜部の文字をも改あらて宿祢の尸をも嫌ふは
けれは古語拾遺の奥書には延久元年神祇
大副卜部兼彦となり 新勅撰集にも 卜部
兼直とのこあり 釈日本紀奥書にも 正安三年

二月大常卜部兼方 兼永となり 正安は後宇多
院御宇の年号なれハ古書よりさ後に卜部の
姓を偏りけりなるかれ姓もなりけりなる家の例を
兼方を偏ひけるを 両月なる年なり
續日本紀第三十九云 延暦七年七月癸酉前
右大臣従二位大中臣清麿薨曽祖国子小
治田朝小徳冠父意美麿中納言正四位上云〻
古書よれハ意美麿を大職冠御子といへる
も誤なり 大職冠御子は定恵和尚と淡海公
なり 或ひは大織冠の父をは御食子といふハ意美

麿呂をば大織冠の甥といへり 甥にして大織冠
と云へ意美麻呂乃父とは兄弟にて国子の子
なりしかども日本紀等にみえしこと侍る由
流布かし天智天皇の御時に中臣の姓を大
臣に仰に申されて地統天皇御即位の御時ハ
神祇伯大将軍天神壽詞読申されけり
此人ハ意美麻呂よりハ嫡流にて有けれ
なりしに清麻呂は中納言に任せられ
景雲二年二月にかれと大中臣を賜はりけ
則同三年六月十九日に事也と新時加給大

家といへる歌も撰せられ 大中臣ハ史籍に於て
尺に執政能宣朝臣和歌の播能にして名を
代々の勅撰に歌ども侍りけるにより其名も高く
末の集に出る歌を出しく此所に記し
新古撰集神祇 大中臣定忠朝臣
すゑもなほきみの御代やにぎはひて万代かけてくもりなき
続千載集雑一 大中臣永親朝臣
身のゆく此みちにいとく世をあさき神の恵れは我をかもさき
風雅集雑一 大中臣直宣
宿からの西の梅の杖それと其いはれ

新拾遺集雜秋部に　大中臣行廣朝臣
身こそかくやつれぬ我も年ふれて積る哉とはいひそめん
卜部氏の家を新勅撰に神く兼直の家人てこそ
新續古今集秋下　卜部兼敦朝臣
有明の月をうつせる庭の面にそれとも見わかぬ初霜
日本紀 吉田家　正三位卜部兼熙
もとも世哉をやよふりの霜とけて絶ぬ吉田の神祭かな
此集に兼熙乃歌あれとも卜部は兼直と
のみあれと朝臣は姓の偏りなりとも先祖までは
廻りこされけるなり　右為氏のやうかくのことし

兼好は家に應く紹介し
かくれもされの説は大りさひ事なり絶兼は
乃意崇称殿賦法橋の系図集に或相
卜部と思兼舎の孫なりとして彼家の兼
字は相にく名のりの兼の字をさけて見へすやと
相し兼氏三代実録の説明らかなれば是にし
えうりなり又或説に大織冠藤原の鎌足も
ての兼ふられ乃名に帝より名代鎌足と
名ひ其子孫なも是とく鎌の字は亭方と
編りれりなしと見えたりと

意美麿は　持統紀より　藤原　臣麿といふ人
なり　意美は紀　万葉に見えぬ　語とおぼしく用ゆ
所なり　倭と　おぼし　とおもひて　臣麿とよめ
誤たのり　大鏡に　大織冠なりといひに　沙汰云の事
譲がれ為り　けや　まされる事あり　おほつくなれ
更なり

○日本紀曰一云伊弉諾尊逃到黄泉平坂
則立隠桃樹林採其桃子三箇待撃者黄泉
雷軍皆悉逃還矣凡厭用桃避鬼尤是其縁也
伊弉諾尊勅桃子曰汝加助吾於葦原中国所
有顕見蒼生之落苦瀬而患悩之時可助告
而賜名号日意富迦牟都美命矣
古事記乃説もまた　相ならひ　桃をもて　かも
邪鬼を避ることといふ　天竺もまた　用陀羅尼門
乃儀軌の中にあり　三国おのづから　かなへる
ことわり　さなり

○又此中に　若然といふは　説に　これ此世ならひ
しき　鬼どもある　術なりといふ　皆これ　ありし　神代
よりつたへられたる　詞なり　倭に術といふも　ありし
宗神紀云急居　急居此云鬼岐于　これも大倭　迹々日百

襲命と申す立くたりし　かゝる物によそひれく
人なりともみなおさまる事　かくいふかつほ
おほりよ文のつおなるいきず　つきといひおほ
おほの古代なとふつおなくし　かよつねよもつい
いぬつおそふかとふは魚の字は鬼岐といふは
なほ伊よ同韻にて　かよりしくいふもやはりすけても
つおといすこやうなりといふ
○古事紀序云亦於姓日下謂玖沙訶於名帯
字謂多羅斯如此之類随本不改云々俗にも
きこえたるかたへしといひおるなり　古語乃

きこえるも常はなきのみならいて
○古事記中巻応神天皇乃段に天之日矛か此
国に渡り来りし事はありけれは初にこれを
知りける故其天之日矛持渡来者玉津宝云而
珠二貫又根浪比禮（比禮二字以音下效此）切浪禮振
風比礼切風比礼又奥津鏡邊津鏡并八種
也（此者伊豆志乃八前大神也）
故茲神之女名伊豆志袁登賣神坐也故八
十神雖欲得是伊豆志袁登賣皆不得婚於
此有二神兄号秋山之下氷壯夫弟名春山

之霞壯夫故其兄謂其弟吾雖乞伊豆志袁登
賣不淂婚汝得此孃子乎答曰易淂也尓其兄
曰若汝有淂此孃子者避上下衣服量身高而
釀八甕酒亦山河之物悉備設而為宇礼豆玖
云自宇至玖以音下效此尓其弟如兄言具白其母即其
母布遅葛而布遅二字以音一宿之間織縫衣褌及
襪沓亦作弓矢命服其衣褌等令取其弓矢遣
其孃子之家者其衣服及弓矢悉成藤花於是
其春山之霞壯夫以其弓矢繫孃子之廁尓伊
豆志袁登賣思異其花將来之時立其孃子之

後入其屋即婚故生一子也
この末をまさもられた略之後撰集に云わや
のゆさ　小弁よませ事ありてきゆくゑ尋てつけく
すゝともにありて歌し　よきことのいひ
それも
いひ人の袖に思ひつきもの数えねはたへをいひかしら
ゆし
おもしろし　ぬ
かをよ鳥神にふかりし若衣濃く花も見えしかはし
拾遺集に出すかとれかく歌くことゝよ続りせ派

太江為基

蓬良ゆのへん廻しと云ゐせはすつるかてらちきは道

信明家集よ

ここそのまゝ桜ふてありし蓬乃思衣ふきんと云せんや

歩出て蓬衣出蓬のあらよせくよめ侍るきこし

古事記小似宝不詳

○續日本紀云天平勝宝年八月丁卯朝幸鴨川

改名為宮川也此鴨川ハ山田賀茂といふ邑

置よ流るる川なり

○文徳實録第一云嘉祥三年五月辛巳嵯峨天皇太后崩壬午葬太皇太后于深谷山遺命薄葬下営山陵先是民間訛言而今茲三日不可造糕以無母子也識者聞而悪之至于三月宮車晏駕是月亦有太后山陵之事其無母子遂加訛言此間野有草俗名母子草二月始生茎葉白脆毎属三月三日婦女採之蒸擣以為糕傳為歳事今年此草非不繁生民之訛言天假其口。

拾遺集 誹諧哥 三条太政大臣のよふ

はやり人の心をめでは　志のひくかすゐはなり
女のおやもろこしくもゑめてはいと清らにあはれく
清くしらぬをといへば侍りけるに三月三日のころの
三歌のよろし　ふとていさしなかふよめる
藤原宮内卿臣
みちのくの歌のかほりはふかしわかくにはふけるこころもかしこし
菰も菟も黒札おほくかゝりに見わかれあはれくて
花もさかゆく末ことふつきあめやゆ中ふはゝれともなり
和名集云　本草疏云　菴蘆子 上音淹 和名波々古 今
菊の草はおもふ菴蘆子みはゝゝる亂麹とふ字
秋の菊嵐の耳に似て花の香のことく
なれともり麹は常にははるといふを
和名にはかゝるといふかいひられんかし
同和名は餅の名の称の字かにかひとあり
○同書二云嘉祥三年十一月甲戌朔戊戌惟仁親王
為皇太子第四皇子也　清和天皇なり
世子惟仁親王と従ふもひといはれけるを御諱と
あしことは池としくくこれ
○同書三云　仁寿元年十一月癸巳　無位源朝臣
至正四位上紀朝臣有常授本朝臣枝成並叙

従五位下ニ叙せられけれは時の人わらひて云
此杖成といふ事をきゝて此せん程なりし天武天皇の御時より
様といふ人のありとて出でまりてつきそひたりけり

○同四年仁寿二年春正月戊辰朔己卯治衛府献
卯杖邀精魅也卯杖のことこれなり

○同五云仁寿三年九月戊子朔戊辰摂津国言
長柄三国両河頃年橋梁断絶人馬不通請准堀江
川置二艘以通済渡許之
橋あるをもみてはあまたなるをもとも橋ものこらよ
あふく川をよこありけるをもあらぬよも哉し

卯杖乃枝也

○同六云斉衡元年三月辛巳有鳥集殿前松
樹俗名右近鳥其鳴自呼云こゝとりなくなれ
ほりくせけりなん

○同九云天安元年夏四月戊辰朔庚寅始置
近江国相坂大石龍花等三処之関剗分配国
司健児等鎮守之唯相坂是古昔之旧関也時
属聖運不閉門鍵出入無禁年代久矣今国主
正五位下紀朝臣今守上請加二処関而文始
置之也

みさらとしなれたなり

相坂の関を越て　おほれ給へは桓武天皇あふさかより
都をうつしたまひし時の津なり古昔之旧関を
以前関を東の京なりしかは乃事と
きこゆ

○同書十云天安二年二月甲子朔己丑在河内
国従五位下伯太伯太姫神並須宮社
これを神名帳に考ふるにあすか郡にあり
称徳天皇神護景雲四年二月に河内国由義
宮に行幸ありしも此時竒垣の跡也
云

渕も瀬となりかはりけし小さ川そこ知て流るゝ
とうたへ所なとお知らせたまへし

○三代実録第一云天皇諱惟仁文徳天皇之第
四子也母太皇太后藤原氏太政大臣贈正一
位良房朝臣之女也嘉祥三年歳在庚午三月
二十五日癸卯三天皇於太政大臣東京一条
第十一月二十五日戊戌立為皇太子于時謡
有九月也先是有童謡云
大枝乎超天走超天騰躍止加利超天我
耶護毛田仁耶捜阿无理食無志岐耶雄ゝ伊志岐耶者

以為大枝謂大兄也是時文徳天皇有四皇
子第一惟喬親王第二惟條親王第三惟彦親
王皇太子是第四皇子也天意若曰超三兄而
立故有此三超之謡焉
これをもてこの謡のことく御位をつかせ給ひしといふ事を記す
平安御系の那龍をかけ給ひしとかくは本紀
史書の明文に見えたる事なり
○同書二十陵四墓を挙給ふ中に贈太政大臣正
一位藤原朝臣鎌足多武峯墓在大和国十市
郡といへりこれを摂籙とする家の本系を好の人

鎌足と書けるはあやまれり　大織冠をは今乃
鎌足朝臣今乃鎌足を淡海公なと申へき鎌式
淡海式と多武峯墓は淡海公なり　同書十八云
○所謂作之早穂二十文云々
これ諸国にて給ふよろつの物をもとめて神祭
をそなふる事をなしといふ名にて大嘗会に
抜穂使をつかはし新穀をもて神まつりす
より神世にこたへし給ふに神魚と如くに晴
権ものしたる人
○同書二十六云天安三年九月四日辛卯今貞

未有決時

濃信濃ニ以徐坂上岑為国堺徐坂上岑在美
濃国恵那郡与信濃国筑摩郡之間にあり古来
於争堺未有時決負親申勅遣左馬權助從
六位上藤原朝臣正統刑部少録從七位上朝
負直進雄等与兩國司臨地相定正統等檢回
記之吉蘇小吉蘇兩絵ハ郡ノ縣上ほ之地也
和銅六年七月以美濃信濃両国之堺徑路険
隘往還艱難仍通吉蘇路七年閏二月賜美濃
守從四位下笠朝臣麻呂封邑七十戸田六町
少掾正七位下門部連御立大目從八位上山

口忌寸兄人各進位階以通吉蘇路也今此地
去美濃國府行程十余日於信濃國最為遥近
若為信濃地者何令美濃国司至入関通彼路
哉由是從正五位下笠朝臣麻呂の吉蘇路を
ひらかれし事ハ続日本紀ニ見えたり麻呂ハ
信濃ニ出来りし御様満誓と号し人なり
吉蘇ハかく美濃より定めおきしところなく
かな添ことハいつよりよりけん也りしようりいづよ
並濃まて信濃の国なりとのこおもひあへり
信濃ニ係りや木曽ハ代といひ事ハ信濃へかよひけん

遥近

未有決時

濃信濃両以縣坂上岑為国堺縣坂上岑在美
濃国恵那郡与信濃国筑摩郡之間古来
相争堺未有時決貞観中勅遣左馬権少允従
六位上藤原朝臣正範刑部少録従七位上勲
原直谷雄等与両国司臨地相定正範等検旧
記云吉蘇小吉蘇両村是恵那郡之地也
和銅六年七月以美濃信濃両国之堺径道険
隘往還艱難仍通吉蘇路七年閏二月賜美濃
守従四位下笠朝臣麻呂封戸七十戸田六町
少掾正七位下門部連御立大目従八位上山

口忌寸兄人各進位階以通吉蘇路也今此地
去美濃国府行程十余日於信濃国最為遥近
若為信濃地者何令美濃国司遠入関通彼路
哉由是従正範所定笠朝臣麻呂の吉蘇路を
ひらきけり年すて積日あつまりて人々さり麻呂ハ
信濃に出来ぬといふ論満誓となし人なり
吉蘇をかく美濃にさためおきしとなりけり
かな信濃もいつくよりかはたしかにしりかたく
美濃まて信濃の国なりとのミおもひあへり
信濃路やきそのかけはしといふ事ハ信濃へかよひける

逼近

恵我之河内衛我蓬莱伏崗
我藤河とは蓬萊田陵之

つらもあれ吉蘇緑たまもとむ苗はなくしく
そうりは

○同書四十五云天平八年三月五日西宮喚右馬寮十列細馬於仁寿殿東庭覧之
とおいくのをもいふ事こそなり

○同書四十六云蓬萊須弥橋長五十六丈広一丈三尺高一丈六尺貞観四年供進云々

○今ハ蓬柳一把云々山里乃ともあき暗しくは
ここのあとぞや なる須弥橋といふ事こそ
あし

○延喜式廿三十織部式云師子鷹葦蓬萊等綾
云々
様撰す
蓬ことは名も山名にて哀きていかなる藤業をこそなく
此ある山名にひのきをとりとなるにこれなる山
織乃たぐひなり名も山のやうとすりたる也
又云韓紅地細落葉綿 韓紅地火打綿

○同諸陵式云恵我藻伏崗陵 応神天皇 日本紀乃
雄略紀には蓬蔂丘誉田陵 蓬蔂此云伊致寐姑 とあり 恵
我ト宗峻紀并ニ天武紀ニ 衛我河原みへ

而あり餌香市と雄略紀并に続紀に
宝亀詞乃中にみえて在所古事記の應
神天皇の陵には御陵在河内恵我之裳伏
百舌鳥陵也
崗也とあり此須不審なり百舌鳥と
いふ所今此世には万代とかはりて和泉国大鳥
郡にあり万代の八幡とて陵の側に山の
社ありしまで其氏人乃あがめとうとく毎年
正月には元日より三日比月肉を喰ふ事
かくそありくたとひ遠国に行く須つけ
ともしきらふこれをせずしかこに陵事あり

○仁徳履中反正此三代乃山陵の外にあり
○延喜式主計上云陸奥祭塩竈神料一万束
○歌垣乃事武烈紀云歌場 歌場此云宇多我岐
聖武紀云天平六年二月癸巳朔天皇御朱雀
門覧歌垣男女二百四十余人五品已上有風
流者皆交雑其中正四位下長田王従四位下
栗栖王門部王従五位下野中王等為頭以本
末唱和難波曲浅茅原曲廣瀬曲八裳刺曲
之音令都中士女縦観極歓而罷賜奉歌垣男
女等禄有差

續紀云神護景雲四年宝亀元年三月戊申朔辛
卯葛井船津文武生蔵六氏男女二百三十人
供奉歌垣其服並著青摺細布衣垂紅長紐男
女相並分行徐進歌曰乎止賣良尓乎止古多
智蘇比布美奈良須尓詩乃美夜古波與呂豆
與乃美夜其歌垣歌曰布智毛毛伎與久佐夜
氣志波可多我波智止世乎萬智天須賣流可
波可毋毎歌曲折挙袂為節其餘四首並是古
詩不復須載時詔五位已上内舎人及女孺亦
列其歌垣中歌数闋於河内大夫従四位上藤
原朝臣雄田麻呂已下奉和儛賜六氏歌垣人
商布二千段綿五百屯日本紀云車形錦
○菱形錦　霞錦　○和名集木部云本草云紫葳
一名陵苕 葳音威苕音條和名末加夜木一云農世宇
蘇敬注云一名凌霄今の俗に宇是年と
いふを農世宇といひあやまれるなり葛かつら
いりてうほよは入ぬるかうへ
○同船具云艕切韻云扈 音故和名由土利　洩舟
中水之斗や
唐韻云淦 故紺反漢語抄云扈布奈由一云客水 水和物也

音よゆをえはへにことゆふかくゆゑ濃すり
かりとともにのこしあへといふもこれなり
○又云周易注云衣袽 作袽女余反又奴下反字又 所以塞舟漏也俗に楠の葉ふを能良といへ
これなり能米といひまくふ伝れかるりしく
いふなれ
○又云釋菜性云白薇 和名美那之古久佐一云久呂久佐一云阿末奈 拾遺集順長哥にぬれころもと
たらちし秋の夜にころもとせむくおもひてあみふ
しこゑよなりしよりこて壬二集にかへす
むなき かきこなとあり

かふ伝こえゆ一家とよめれ伝へやはり
流かし
○万葉集第六云天平八年冬十一月左大弁葛
城王等賜姓橘氏之時御製歌一首橘花者実
左倍花左倍其葉左倍枝尓霜雖降益常葉之
樹
此御歌を仮名にかきたる本に落句よのきとあ
かとせたるありけれ共月の白にこれも落句をしめ
よくひつくことしこれはよみたるものは
つまゆくはよみてはやまりかるるをとえたるへし

○萬葉集云
郭公鳴之春之山邊庭皆道不輸人哉住濫
聴も昔郭公の名のみいかてか世にはなれし名のみて
物ことなりける池と思へし名のみていさね
人といふもすてん いふなり
恋佗景緒谷不見芝玉桂殊者根佗語丹堀
手指店
後遂丹何為與破欲玉桂恋為留屋門丹生
壻留藍
此二首よ玉桂といふは月の事なり

秋之夜之月影許曾自木間隨者衣破見江
亘氣礼
此哥は撰集秋中には妹の哥とくにわかれたし
人是はをとくに下句おちたるものとよふうつり
たまとはりくこころへきし 此をいふかせて海
つかみくこころくへし

○萬葉集文章生云勅吟詩寄託秀才之慶以来有識之士
式公式私争好論殘立義不坐謂之癡鈍其外只
醉舞狂歌罵辱凌轢而已已故製此篇遍寄而勸
之
風情別識磋池更任適儒四面多尚本人嫌心

轉石論經世貴口總河應醒月下徒沉醉擬嘆
花前獨放歌他日不愁詩興少甚深王澤復如
河これを諷諭とこのむといふべし　詩に
心ある人をして感動させずといふべからず　又
東坡文粹卷一蔡(?)傳野史雜詩云
應煩劇務自余時輩總鴻儒
此鴻儒との字をもとより自注にくはしく當(?)の
ことく書は記中納言の延長以後詩序にも
見えたり　宋儒の詩の唐より劣れりといふは
此諷諭に拘(?)れる(?)故(?)なり　此中和歌はおとれり

余(?)接黄山(?)此の諸(?)へ體のことくなるべくよろしき
なし　文章と評(?)へし
○圓覺經云雲駛月運舟行岸移　唐の曹松が詩に
云橘(?)水銀山動楊帆覺岸行　此下句おのづから
經の文に似たるへしと佛日(?)先生
いはく行船にのりて人見れば岸のうつる(?)ことし(?)
此事もあり(?)曹松が詩に似たり
○徒然草(?)いふ(?)…(?)
…李德裕の詩に云　愁衝毒霧逢蛇
草畏(?)落(?)花(?)遊燕(?)泥(?)此下句よからずとて鄭騷云

懲熱羨而吹整上の時ありて又此戸入り
かはへり
○ちはりし又からとりたいふ事にうつのもとより
ゆくはしとこはうとはいふ
鼓吹けれは御車の月はのおとかけりにたかう
て人々つたといふめり
又鐘けれはとうしうあるにやまとなでしこ
しもさればこそ名を人々くれうしあるか
○行けれ源氏は上のかうりけいできえしめ
めはなといふりえの袖ないえくいまんむりし行れ

のかはれといふ事のはりけり時宗ハ御つもとて
行とぞりつてよろいのこと、ふつひけりなるに
さるさのうやつことなんいひいふうを行の中り
もとむら漁行かんひとひとかりいりはゆかりて
よりて人々につの中ひけりえりそれをいへれも
こゝろんせりなり人いとうけりてけりおきなれ
いふのゝこえれ銘とぞりいかこう行にうつゝにいはれす
ますをりぬ子あえたりさそあへき人なめりとく
みなようらいぜくよへからてこゝろめれそんなり
あつせとやし・みけうするけりきこゆかゝれけりいと

かくれなきはこふいれくやしきかな行とうろ
れきれ行こゑふはふを尺屋せくの行を涙ふ
姫しが鳥そしよことふこ手ほ行をこ行
ゐ車かきすりねかくくかき雅中く中くふかう
まくはちこやしなふ様よすくと御ほきう
なり給さ三月七日ふたつはとふなれかとすへな
なりねむるかとあけはとほしくかさほけさせこら
中のうらよりもいさんにつきかしなる
かとたはちこれうちのけはくかうおもせ不なく
やのうちハうつれ雷なく色りこうさうりかきれ出し

ちかしくさうしき時もはかな尺まてさうしき
ますも世こそねたくれしき手もなくなうさうり
かき雅行をとうことひさしくなりほ乎なりは
ろいとかほさるふゆうねまて名残ともろといひのあ
きさうほよゆくほけさえんあすさなよ行れかうやなあ
とうけ給ふはれと三月うらあけほそよろいねほの
よそしもほふ之たん行くれと名行くん八万比楽
以十六行在前撰述九箇神女贖近押之衆
作歌者若竜号曰作此浄瑠璃也此浄瑠璃季四之月登
江遠に忽遍叢集之九箇女子也　而嬉笑儀然

容无匹云〻
しけれハたかとりとよひし也昔ハ竹とりとよくいはれ
られしをかくして名をはせはさりし 所収 六帖
安寿命時今此ふけとり所ぞうとりと
よみわかるを到来ニ而難をしをてり
されと大和物語よ
たかとりたよふをきてとめりん九ハこさとよとこ
ひしとめくかくさハかよりてもなくしかなかなけの
中ニ人あり事ハ内外曲ハなり人をさくり 宝楼閣経不空
三蔵弘法大師請来 此ノ一云佛云乃往古昔 勁有三仙人云〻

時彼仙人得法歡喜心生踊躍於其住處便捨
身命所捨之身猶如生酥消融入地即於沒処
而生三竹金為莖葉七宝為根於枝梢上皆有
真珠香氣芬馥常有光明所有見者无不欣悅
其竹生長十月則自剖裂各於竹内生一童子
顏皃端正令人樂見最勝端嚴光色殊異相好
成就時三童子即於是時竹下結跏趺坐即入
正定至第七日於其中夜皆成正覚其身金色
三十二相八十種好圓光嚴飾時彼三竹皆変
成七宝樓閣云〻

あまハ經よ始り是ハ宝楼閣大陀羅尼の不思
議力をこれを法經なり經ゟは男子女子を
めくまれたまふこれをもとして以見出せり
又後漢書西南夷傳曰夜郎者初有女子浣於
遯水有三節大竹流入足間聞其中有号声剖
竹視之得一男児歸養之及長有才武自立為
夜郎侯以竹為姓これ又竹の中より人の
出せり史記趙世家曰知伯怒遂率韓魏攻
趙々襄子懼乃走奔保晋陽原過從後至於王
澤見三人自帯以上可見自帯以下不可見与

原過竹二節莫通為我以是遺趙毋卹原過既
至以告襄子々々斎三日親自剖竹有朱書曰
趙毋卹余霍泰山山陽侯天使也云々
竹の中よりは如此事もある證なり　智度論
貴十云真珠出魚腹中竹中蛇脳中　おもひと
竹より玉の珠あらはるなりかくやひめの名ハ古事記
垂仁天皇段云又娶大筒木垂根王之女迦具
夜比賣生御子袁邪弁王これ好かくや姫
かくやひめ紀たまひけ給ふ人の中からとり
あともれたるさんこゑさハ文武天皇の御代の

從三位大伴宿祢御行ちうなこんもとめ給ふ
みかとの人々みかのよや婦人ことはりにすへし
詩云由辟之言俾出童羖注曰童羖無角之羖
羊必無之物也史記封禅云曰昔桓公既覇會
諸侯於葵丘而欲封禅管仲曰云〻於是管仲
睹桓公不可窮以辞因設之以事曰古之封禅
鄗上之黍北里之禾索隠昭云設以不曰草可得之物所以為
盛江淮之間一茅三脊所以為藉也東海致比
目之魚西海致比翼之鳥云〻於是桓公乃止
又刺客傳荊軻質索隠曰燕丹未歸秦王曰烏

頭白馬生角乃許耳丹則仰天歎烏頭即白白
馬亦生角風俗通及論衡皆有此説仍云鹿門
木馬生肉足也これらのたくひなりあれなは
あけすなれふりとりて和名集造作具部
云雜色立成云麻柱阿奈〻比三代実録二十八
元慶四年十二月四日右大臣基経を太政大臣
とし給ふ宣命云天下政平相安奈〻以助奉
毋久奈利奴とよませあなひ八かうこく給は
なけかせ給ふなるへし仏の御名のもちゐて
西域記云波剌斯国釈迦仏鉢在此王宮南山

持感應傳云世尊初成道時四天王奉佛石鉢
唯世尊得用餘人不能持用如来滅度後安鷲
山上白毫光共為利益四天王各又鉢をもち
来りて仏の御前にたてまつりて給へはひとつとし
世尊の御鉢なり蓮華光山のふもとにうつし
あまくりまゆかりにたまへりしを給ひ
なかりしを移ししてくはらいの山乃
しられつめのうへにくりしのはいきうれ
より山よりあるへくあさくのはく はつ世
世のはりのとをはつらひく津へうまれたる

○かさらすり 文選に珊瑚をあめのえんくさと読
也火浣布のかはごろもは異録云日南北景
縣有火鼠取毛為布燒之而精名火浣布捜神
記云崑崙之墟有炎火之山〻上有鳥獸草木
皆生於炎火之中故有火浣布非此草木之皮
則鳥獸之毛也魏文帝以為火性酷烈無含生之
氣著之典論刑广門之外是時西域使人獻火
浣布袈裟於是刊滅此論而天下笑之このやす
らいの火史記三代世表第一云詩傳曰湯之先人
為契契無父而生契母与姉妹浴於玄丘水有燕

衛卿隨之契母得故含之誤吞之所生契 索隱曰按
史所引出詩譔故曰詩傳殷本紀云
玄鳥翔水遺卵娀簡狄取而吞之
契生而覺堯立爲司徒姓之曰子氏子者茲也
茲益大也詩人美而頌之曰殷社 詩出 芒〻天
命玄鳥降而生商〻者質殷號也天人のよそ
ほひしをなを女山の中より出きてあまくたり乃
くれなゐをおりくはへてありくとは見へ
天孫の御神のなよりきまへ侍時乃御事
御即位にはうれしきまつれりつり

○ うつほ物語云 ちかきとめてより侍るそ

はくしすゑに申しまてとうすくはての
よをはるとまをしきて侍る御るに今も
かく御はしたる女の詞にはしるよ侍るを
あれなり
月ちそんれはおもひ乃まさにかくれまいれをはつ
こふつゝくるてきのゆらはとて初いて見る
つきていさんやうれいしのおもひいとかしこさし
月ころうちかりよいさしかなりにて侍るへし
うとれん人まもこうなけのことをもいつれ
にかえりのことのなかれきてむかへきてまう

らんよなれとふ日ははやくとくてかへさる乃
いとゝすさましあやのうちきにかへりこゆ
けらし尾花の末みやこまりて日みえわたる
すまゐけりはなもとかれすなりすさましよ
あれのそことみえつゝ吉沢の原
むけここそもしらぬこともしてわかれ松のこ
かへりつめたきと紙かいれさせて身ゆへてこゝ
日ならし人もえんあはうされにはさみき
にうきぞうきふるきのひまのやかくや
むくめれよおもむけまさにいさくるのの

あはれすりやはりとみえ侍れとここに侍る
ぬしも人もすりといふこれなりの和名集より
藤をもそりとよめり何慈なりさる物まて
こらく物ほいあらくいぬをもなつきよりかや
日頃の物もいとたいらかなり情ちつけさる思
すんれ侍とみへ小の音ここ埃の物も胞なり
侍よいふかごとし。
日ころやとこそ人称ことよ分くとここに
春をほとにすくしれ袋をおほくいれて
文のうつるおほくまとふ備ほまいらせ候て

なれとも　まことにしつ心なく　ちりゆくこそあかき
つよきにほひを霞にまかせて　それ　ちりゆく
あるひは　あらしのはけしきにて　ちらさん
同じ心に　とも　あはれとも　紀友則
ちるらんとはなれ
同し　花はいつもきれいの山にな
さんとおもふれ　ちるこゝろのあはれは
ちらんといふとも　たゝこそはなんとはなる
へしとやしなひ　ことはりなれ　云々
同しく　かなしき心も　ちらん　とは　あはれ

すゝは　かの昔いさこれ　とうつる松も
是は　をしこころん　かきて　からすのひぬ
今宵の事よ

藤原興風

此の事は　高砂の松は　なにはの人のつまふ
これは　おのつから　かよへは　又は　高砂の松
この松よりも　かの松の事は　ひとり人はなけかん
深き心は　此よりも　又は　むかしの事をいはん
さりとてこれを　松の事は　すぎて　たれ　松こ
なのめなる事は　あはれと　なけきたる　山と

おほしてたのみけるかたにみちをもとめんはよしなん
それそれのかくまてをかれしまね人に[illegible]
聖教にまさるおしへいくをすしとよめり拾遺集に

和泉式部

はかなきを出るの山の峯にふかき心も人のなけきさた
同いかてはまつさき世ふほとけといはれたまふな
からておもりそまつへたる　疑ふよいさまれかう
仏まもなりぬへかりける　ねまといへりこれは
称名同律師　山寺へなふのせかしし
ちんなく此命にそもかへらすにまちたたこそあらめ

同　左右て同かりけるよしして[illegible]あ
まよひしたかへ　同御うらせかりけりと
あたりをつくりつゝ法　申たり
同されんてこのこゝろいて　同し[illegible]まふ
老らされよろほゐ法御さくまれりまさむ
おのくはいとも御とも此人をものとそつくさて
いかりふ為すへ　人間万事[illegible]如泥　同はさこひ
[illegible]なり物ふれほとく　ほうち[illegible]
それかんと物を方と　ねさます　同律師
世すてまつるうけもし法つき御[illegible]さふて

花さへ香ことなりまさり其ところ山家乃
はれなるすまひ其外に侍れハ花のかさりなとにも
本のやうに見えて見そ侍るにこそ
遊仙窟に云輝々西子薩萬畏彈穿細了腰支
参差經勒斷 源氏に花のかさりにも山本と
いへる侍ハこれとはいとれり
山をひかへつくりたてゝさし侍るや柳見えて
まつり其侍り
はなとしやり水のほとりよりなかれすまたん
うちすみともあかさぬうちさせてみなとより川よりはきめ

なとはなとこひあへり新古今集に
なのとり川やなせの浪たちかへりこちやかえりてやらん
いかにけにたてそよれるさきしにつきそそ目にも
御たてまつりをりかけそしまりわたしくそり
ぬ
同わすれてあかさてまてさうそれなともすか
よろしく同中将なか侍五きんにみさきをとより
おちくこすむかりみちをとりてそんなことせ
はなれなとこれにさやあらんもまたこれみて
のるかねの馬すさかうらかけんやとのうちあふ

円らん人ならうこそあられねつきてんすそきら
志ゆう天女ふをいうてせまししとおもしへんせうへき大ずね
なり。
円いとせちよおもひよう綱らうにふあられ隊
けしきかんらて
春風の吹にゆけふさうう花雲死のうはせてる成
新勅撰集に家隆
此うた　桜ちる花に春風の吹上の浜によせくる浪
これ又右の歌のちくあるをそ又松明し嘆
とのあそふ

まさくる波のおとにも玉つしまにぬ見とてありん玉出嶋
かなしみ三首ありて玉出嶋とよめり　三代実録
貞観十六　元慶五年冬十二月廿二日丁酉　紀
伊国正六位上玉出嶋神授従五位下
これ玉津嶋神なり
たゝこそ
我恋は吹く松風のいとはしとおもふらむき
これまた右の歌に
我せこかいひしやくそ松風の今はいつしとおもふうちにき
たとせよとあり千五百余年前に

通具卿

此卿も時しふなれもここにて顕輔家の

新古今定家卿なと 風の時しとなりといふ

雅世と并は六條家を今此歌を考られ侍り

けりたるも見し

藤原為家
世のはきや我ずの人はよそにたのめたるまで

家の後
侍りふことなれ抄玉柳にも見えすと見へきかん

神の前も拾遺集歌の二條家の前は宗いなり

源氏物語葉の山のさくらは今はまさり

今か後を抑ふ

梅の里花を散らしみよしの山のさくらはまださかり

といふ歌はけりこれを家持集にはのせて侍りと宗

きまるか玉葉集春下拾遺

里は風散らしそ是行の山桜はまださかりなり

これを明名此歌家集にも見えぬと

源氏にきこゆるといふ詞に物は日本紀にも師匠と

ひとりあり浮すまさく定紀にとかり楊名介なり

楊名関なりこれはた本は梅の下 楊名守紀し

らは楊名様なりけりし 楊名といふことも今の

世にいふことかわかたなくそれそらひよはんものにてまたたひ

のこれたまへし
このおことのかはれはさは人の花のおもかゝれ悠を
いつ法は従よ當代とい法物なるへしかのこれならは三ヶ
一ヶ蔓ありのよはりのかこれなら所まいりせう兄文在こゝ
ろとふいて弥ひくこれこ閉めてはなちの四ヶ
かすりるよところせききおはおりてあまたれ
よまりくせよこれこう彌のこれいくれいつゝうま
らぬう侍らんとかぬ定ららやせそこゝろ一
すでもあらんとのふなかよ人るかてそうぬ
はぺるかりすたしはなちひひりうゑすゝるよ西世紀伝なは

けりてとあふふくん人し紙合をうにぬれむとらひ
百けるそ三千餘あまりたいそひの忠まむなりゆそ
漏便なるん二本あり三日夜のなちひれ事はらふ
文徳実録をひ来ろ安母子安女れ不まよ将桂波集の
実前殿居の前代ひろのふ又てうりこゝろかひろ
史記云晋悼夫人食輿人之城杞者絳縣人或
年長矣無子者而往与於食有与疑年使之年
曰臣小人也不知紀年臣生之歳正月甲子朔
四百有七十五矣其季於今三之一也吏走問
諸朝師曠曰魯叔仲惠伯會郤成子承匡之歳

や七十三年矣
本朝文粹慶保胤し　記云芹田三之一日
ひそくといへり　五雜俎曰陶器柴窯最古世傳
柴世宗時燒造所司請其式御批云雨過青天
雲破處這般顏色做將來唐時已有秘色陸
龜蒙詩云九天風露越窯開奪得千峯秘色來
これよりに瓷のそらひなるへし
清少納言も蟷螂の神代事代かも得ずまうて
のめ代末のかとする念の事まで八種など
雜寶藏經第一云佛云過去久遠有國名棄老

彼國有老人者皆遠驅棄有一大臣其父年老依
國法應棄孝順心不忍堀地作密屋置父孝養
爾時天神捉二蛇著王殿上言若別雄雌汝国
得安若不別者汝身及国七日之後悉當覆滅
王聞懷懊惱共群臣參議各称不能別即募国
界別者加爵賞大臣歸家往問其父父言易別
以細耎物停蛇著上躁撓者其雄不動者是雌
即如其言果別雄雌乃至天神又以一栴檀木
方之正等何是頭臣問父父答放著水中根沈
尾挙乃至天神歡喜大遺国王珍奇財宝汝今

国土當擁護、王大踊悦而向臣言為是自、知者
人教汝臣答非臣智願施無畏乃敢白陳王言
設汝有萬死罪猶尚不問況小罪過臣曰王言
国有制命臣有老父不忍遺棄犯法蔵地中臣
答盡父智唯願大王一切国土還聴養老王心
生喜悦奉養臣父尊以為師普告天下不聴棄
老仰命孝養なをわすれ玉の跡絶ぬる所事なる
林氏もろこしの文段の中ねりけるとこと
以り能代よりこれをはかな花なる人をすて
らんなりたなるまよしりて近濤魔を払れ

様の事を粉くまなふれともいりてあうすとの
かくりとそれまふかに付なるへし
戦国策云斉襄王卒子建立后事秦謹與諸侯
信以故建立四十余年不受兵、始皇嘗使使者
遺后王連環曰斉多知解此環不、后以示群臣
不知解、后引椎椎破之謝秦使曰謹以解矣欽
明紀云又高麗上表、疏書于烏羽字隨羽黒既
無識者王辰爾乃蒸羽於飯氣以帛印羽悉写
其字朝庭悉異之これらに似たる事なり
蕗をいふ滝下なる秋のあらそひて人家みられとか

けらん菩薩をほめんとてこと葉をいへるなり
仏眼のさいちといへるはうもの説すとて瑜祇
経然といへりこれは秘密の中の極秘密の経に
して侍られたやすく披閲する事を許さゞり
けるを物語にてひとつの経軌は仏典を経にして
ほめいまふ詞とくに御つゝし越三昧耶とく
極重罪なり源氏物語菩薩をあまりことに法を
佛のいましめなるを此ゐ給ふ名人の法に返る
さにかくしこむろ事をひろめつゝまつり
侍りこれは仏典経の法の支なりされなる

秘蔵ある事なりこれ程の事もはゞかりしく
こゝろよからねばこれはいまんや伝法とに仏眼の
さいちを誦する事を瑜祇経は侍りはるほとある
の経を侍らで秘密のはの事なり
極葉子となるゆゑは深き秘密の奥の川
からなからてとし聖の道の奥秘物出く
経経うこれ秘経経すしませさる人はゞとこれ
枕は其よりてなりてありたせてよまも在所
まぐりかてはそふこゝろなり
大和物語に

あはれさいれ池の水なれそんねともゆうきうんさしかうさい
はさりいたりひらきかて いろくはいのえかはつけていう
ありよそは詞これたのり神代紀よ 神代もつきと
よめり此歌の字数今は とい可見なり
良暹法師ありけるが盛ん金葉集にはりすきなり
女のもとに
かしいはあ風雲のちかきかいねともかまとつかふなく[illegible]
返し
うらみ嵐の中の葉はなかれのまに此風かひいはりとそせよ
此二首を続古今集に載られさらにと返して此歌をも

俊頼髄脳とかいふ物に 源兼昌朝臣
此集に右歌にあり 此歌とはいはり
拾遺集に若菜を金葉集に 俊頼も
これ人の歌にかうつり給ひしあまへ文の字をつけつよ
はかなくうつるをつけ給へる
源義家朝臣
いはそめし昔の若葉のかはれたきこと又ありてかはりつる
これまで和歌し
こよみならはのよますつほかけ代をとめられて道
金葉なん物のりとふはりといはくへしくは

はさりけれは
時の人のそのおもむきを深く感じてあはれみけん
これをも続後撰集雑中に僧正遍昭との
せらるゝは此たよりにやとそ
故は是のうへ宗于の君なり 此つゝきに我身の
えさりけるにそぬしそ思ひのまゝにかはりけるころほひ亭
子の院は紀伊の守よりなつきたまへるを
なりけりたよりの歌にて人々うらやみける
うきやしなひ うらみあふ 天皇の御まへにあひくるしとてかへりたまふのくらひ
故にこの歌ふけひの浦によりて清正のみこそよしとまつかれは志

此哥新千載集には忍ぶにいれられたり こゝにては述懐の
なし
吹飯浦は紀伊の國なり 清正紀伊守にて紀のかみになりて
ありし度ことにかよひまかりて
天津風ふけひの浦にゐるたつの なとか雲井にかへらさるへき
亭子のみかとにたてまつりける かへし
けり
此哥は人々もあはれにおもひ 紫よしとおもひけん
此哥後撰集には忍ぶ二年 監命婦とかはり
このうへにかゝく 監命婦にしとて

云ありくはしくつきされて後なかに見えわかるに
にあるや
行植か随るよふさ上有
立すん本ありともなりての身ハ云此分るよ秘さる
後撰雑二ニ始此こふね
今よ此たなりふなし大ほうさ候家の下か草此身なれハ
かしハ木よ葉守ら此榊のまうしける代志ろくて主しれ
右清女納言よ木ハといふ事ようし宮のいと松たし
はとりの榊のまへ成りんとかはりてはとれうし 顕昭云
葉守る此榊とは 樹神なりよろ川の木よ此の

榊なりけて葉守なをよりなる 榊といふなりかくも
頂せうきよ待と甚借まれ云ふる 葉守の榊なる
かしハ木よよあれさまたかしハ木よ居く時し
木ともよりし候ふや 仁徳紀よ葉簡姑と頂
せうまして大嘗会かしハをもとしまうかへし
うほなる物語 園田うりれ君ふの
花の下とうれハ於伊の名し
松ひてさいりかしハなかなりふけろ子をとふまとかそふ
ささしかしハて百葉なく小松の葉なり百えそはま
いう傍
今月陽此山よ鏡川まてしまりかりかすよはりつと云へしのせ

心にはわれぞまさりて思ふらめとありけり　新
なにへしらず高山も山峰も不読とあり　和名集には
栗濃とあり是なり能宣集にありこゝはなゝの家に
さとうきよもみちつらん保て　（むろのしきみハ先女の古歌）
緑ならん松ある高山の夕日をいふ和歌ならは紛ならん
おとめ見乃なりこゝにまた字のおちたる海山やとおもへん
従には　さいふなる保元平治物語の事なと
家に住師なりことにまて志ふりまていふのしらせ見えたり
志けりとみえたり
かくふしに親とありて露は身のことへいとゞふかき契見えたり

万葉集第十二に
あされく草の上白く置露のきえなばともにといひし君はも
はかなさに　れとしそれありはなゝありてとれを志る業
平かくかくおけり　元には歌主のれとしそさまに海に　平中男女乃されくわかり
わきまへ知らぬ身に我ら此はるまらふなりてふかれたれ涼と此
新兼輔集に同したなりけれどとこれはふきさせゆかり
よ　かゝりくとて君とわかれめとあり
下にも一くれといひけり人あく人をよおひて
おもせうりをは
かくれぬれそこの下草みつくまでこゝろまねともかゝるかりけ

ゐし女

みつからか為にかはりてよみてやらしとあれはてかゝれは
伊勢か家集に神の斎ひ人とありてゐし女は斎宮かかれぬ
とあり新千載集には伊勢 枇杷左大臣と文ありけり
わひしかりけるとはかりゐしも伊勢なり 伊勢集に
よりて載らる

元の人衣のすそにかしこまりて 其歌は出て流布のもの也そ
けふ侍けり拾遺集其の歌に僧正遍昭にわか取流れぬと
とく／＼の人云ひしと載らる 其の始に出しと侍
深に出くと見

三十六人集

万葉集古今集後撰集
このかた納言公任卿にみえし あまりむつのうた人をえ
らひて これを色紙歌人をまもらはれたるより
かきいてしこと
ふるきうたのなかにもはれなる人のうたあつめ侍るあり
異本集なとも世にひろまりあつめなともいふなかり
あるにはよんとおもひつゝなれは書中にしるしたれはへし
て侍るはうたのみちはうらひのひらきことにまさりたる文
康秀古今撰集見文 猿丸 文屋千里源融

忠岑集除くこれより後撰の作者と
のさまへ中かはらすもかはりなしこれかは
よるなり
今まての集ハいまた詞書しるし給へる物かたりなく
万葉集乃中よりぬきいてゝ書出したり
古今よりこなたの歌をあつめ給ハあとに見へたり
ぬきのたまふさまとかく書たる家集の様乃
後撰集にもさりなくてなるへし
　かくはわれ見しとひとつの家の集の事も書たり後は
これも　拾遺集は世の中にもやまとうたとおもふ人の事也

此くものさらに古今集のよふにすくれたるなり
これは新古今集の撰者にもなく家集のよまれ
家集には皆のぬきにはいかにもよろしからぬえ
といふへしこれ
ともかくへかくれたる人々もあまたありとそ見へたり
大かたハ和歌集云後撰拾遺之要文正時家居常
照射見一白鹿射中之明晨尋蹤血矣云今按照射
止毛之蹤血波加利今をいふならはとすへき紀家の書れ
こともなしとおもひけるなるへし
躬恒集

ひさしくふる人はまづ其道をしらんがためにこのこひを秘蔵すなり
これぞ後世によくはやく悟るやうなり　かゝる人となり
かくて歌人なりしもなりやとよむ志りそあれ雑にてや
志りそあれさいかなる俳のあとなりや
花の文ハちかごろさかえてこゝにあれと也も様によはへさかえ
けれども今によき歌人ちかごろさらにいふなる家より
玄々集も見るにこれもこゝら蔵を秘として後々そ山河の流
新古今集は後撰は
玄々集をこそこれ秘蔵の中にあるとて堂の流によりとある
古今集ともにあたれり

和歌の流は時にしたがひの別也とても色のかはり
是は撰者集よりはんの世にけりをば内裏ありといふ被あ
まもと俊成卿の詞書云松新年 十七年 と云安表
後撰のさい定家卿はゞかりて我名は深く
とかくせよすこしはぬ屏風のうきめしはかりしられ
すぐに山をそへられしとも前はかりて源によまでさ
はゞ源氏を時は色々に秘かりて又作りの時に
わかのうへはさこそ忍ぶ長源などあれどこれかて
為家卿の集に 貞元三年 神無月 侍従
みちのくにはいはぬ 八月廿五日 庚申夜

へてまんゑふのくあつまりはいにしへのみんなり
神代よりいひつたへける何川のよみ人あまたあつまりて
和名集云多気郎多気佐多近衣云多気太子杼
神仙伝云兼名苑にあいはらはせりかあまたあり
まことの歌は川をいへり行恒も其ことにかくはよめり
世にそのたくひの哥にも川なといふ事を東風
よみ行のとなへ哉しきこといへるをしるかね
なりもしいはるまにうつせ給ふ
御としの墨の色ひかしの御厨をはみえ杖とかせん
新勅撰集に　康資王母

はるとまて花橘にやとられて空にも其はかなくなりゆかん
ともいはれし又かくそ云よ
ちかひにはゆえ枕も結ひてくれはなかうても有かたの
拾遺集
天暦のみかとせさせ給ふ時内の御子にやとりせ給ふよ
御かりにかんと申しさるすせむかしひとく
花せんゆたかさなひすしかりしをつかはせ給ふよ
絵よみてかかれとのむかふよいはひもとなしより出ふんてはね
さき天暦のみかりせさせ給ひくいは時代お送せん
めでたくよりといふ喜悦のきと御れ年序寺いそれ上乃

良因にてなれば良因の和州にして紀らもそこにて
それは此よりて我よりて今志かし海まれその
御心なる人し京より都しをの八と万葉集第二よ
萬葉强語云二今ト字ハ行なるべし
志ひくこととの淡ことし出して花つけ着ぬへる歌
いふまりよりれもとへとかくるもよりなこり よしやも
常に乃もさらゝまた吉国なる國見えたる歌如まは
人あまとらつしいつまる志やの如もやさうしすの
見ゆく京たくちろれを御しるれ也さかくるをも
くのかゝふすゑしまれかもゝのしもなすゑて
聞えれん歌

宮まかりしそれの雲見乃原よ見らともかくすべく かくるべき
これた清き京の滝御流しよおりしましを教
御供のくよあれ出流ニ志まれをもいふの花れやさ
かくてたる神ならひ大和國宇陀郡八咫烏神
社 [illegible] これは又新撰姓氏録云神日本磐余彦
天皇 諡神武 欲向中州之時山中嶮絶跋渉失路
於是神魂命孫鴨建津身之命化如大烏翔
飛奉導遂達中州天皇嘉其有功特厚褒賞天
八咫烏之號従此始也 これよりの加茂建
角身命ハ山城國愛宕郡久我神社同郡三井

神社に満して賀茂別雷命乃御祖父なりきと
梅の御題出花志満とありけれはひとへは
詳かならす猿丸大夫集
志のふ山[illegible]とり[illegible]の[illegible]なきかなしき
志ける[illegible]花かりきて[illegible]なりけん[illegible]
家持集
[illegible]日[illegible]かへやそのかみなれは梅花神[illegible]
おもひくまて[illegible]我[illegible]ふ梅の花ちるは
木[illegible]人[illegible]あ[illegible]花梅の神花とりなくて[illegible]
これは家持集に[illegible]人もあらしなと侍り

梅花は[illegible]はよりなとの梅[illegible]いまさか[illegible]
志[illegible]花の[illegible]そて[illegible]梅と人[illegible]
春風乃[illegible]梅花[illegible]
我[illegible]人[illegible]
春[illegible]の[illegible]
より[illegible]もと[illegible]梅[illegible]
て[illegible]梅[illegible]
[illegible]ことはちりて[illegible]の山[illegible]
梅花て[illegible]の[illegible]のて人つ[illegible]
春[illegible]かな[illegible]

[illegible]　[illegible]
大川ごし月のまへ
[illegible]ごし月見

[illegible]衣[illegible]山の時雨[illegible]すこし染て立入りなけ
清少納言も枕にも[illegible]まされり[illegible]云へり
同し[illegible]東屋の詞かゝるふみにもいふ[illegible]
うらしめかりかゝれいのあるまれふかや
[illegible]月[illegible]宿も[illegible]時[illegible]
[illegible]の山[illegible]枕にも[illegible]
時雨[illegible]今[illegible]妹[illegible]
[illegible]山[illegible]我[illegible]
[illegible]の[illegible]我[illegible]
[illegible]の[illegible]月の[illegible]時雨

わきもこか清衣白妙にさけるかきねの卯花やとれ
此哥は[illegible]の長歌にて神を[illegible]
[illegible]山の[illegible]時雨[illegible]
時雨[illegible]の[illegible]
[illegible]も[illegible]時雨[illegible]
我[illegible]
時[illegible]秋[illegible]衣[illegible]の[illegible]
秋[illegible]月[illegible]
[illegible]時雨[illegible]
[illegible]月[illegible]の[illegible]

おく山の岩根乃苔ハ年ふれともかはらぬ君にあはれ
ひこ星の羽せて待つ天河をいむかしこふ水まさるらん
天河うつる人舟も紅葉ゝの舟と世に橋かけ
夜もすからなのやすらひて舟をかはしのはしもなかなか
天のかはこよひのよはに天川うき月のこそやうつらむ
銀河わたるやまた瀬の渡し守とりもとの渡し
ほしのかはの雲まよりいてたる月の影を見はやと
一とせにひとよのみ天川いつもかはらぬひろさうらん
年夜にもわたると待つ天の河まち橋うち嬉しく思ふ
わたりきの橋流れてより天川水に沈まんかたうらせん

天川うちわたす橋もろくも我なみたしかれさわたる
妹待ちに橋かけても天の河をわたるの主のつれなくて
かさゝきのつらさにかけてみる橋も中になりかはりて
よひよひに天乃河原に立ちともよそふらうもならしと
よそにかは夜なかにわたるもよそめ
鵲のわたせる橋もくれ川となりて君まつ夜は夜半やし
ひとりとも万葉の七夕集よみ橋流れなりわたせ
川辺とも世にもよめ侍るかれかし
かゝる夜のかさゝきの山よりわたしくもつりさせそふきらくとる
さりしにわたるも世とそわかれともかさね待つらんかたそ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

詩よ[illegible]

[illegible]

業平集

此奇今之板本八代集ハ撰者マハ枇杷左大臣より
右門〔?〕これハ業平とあり

よひの[illegible]

[illegible]

此奇も[?]撰者五業平とし又古今(?)集二[?]

たの[illegible]

今三首は撰集[illegible]

枇杷左大臣[illegible]業平八代

[illegible]家集[illegible]枇杷[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]枇杷左大臣[illegible]撰の

[illegible]

兼輔集

[illegible]

はるの小町集にも小大君集にも春夕花の枕とそ
いひたり
花よらんでゝもえつきえたるを目より色れてさ流よ流れかけと
かきつけてあめ待ちけむ人はこれなり
三月つごもりに枕とし　三条右大臣定方也
梅ちるまえのはるには藏よりゆのめきてねかめのみふ
新古今には兼備の子と石硯のみとかくあし
其句のとはゆきひれつこまりふ三条右大臣入
流りいりけるとあれ今かもしといふ文字の
かゝるにあれ

いとひとりゆめ明け梅は末のかこと花に咲きあらん
いそらとりとは見れとよあくらとりとみんといけぬかふ
いなかたこれなきこ也ら寺なり　初めには藤乃句
ゆめへはもての句なられはちらんとありそこふも奈句ハ
かゝられ
建長の頃の小西亭会よいえ重とよかれ　ころかれ
判詞にも此哥を入れてきえ古おもかゝられ
はしさうて侍山あこひのえハとれりよかれは中とたのまん
花ハひのえをかくせ侍なりこれふそ　桜くを　昔そ
日本紀万葉集なと　れれしく忘ひてかけ侍ことせ新ん

同し

朝忠集

すけ侍れたてまつるとてかはらへせうとゝもん
のもとに中ちかりける人のかすかなる人にあれり
きゝ侍りて書つかはしけることゝもいとしくみき
たよりのくちこのみちをはつてとるん いひしかは
ひつたとも中といひそむるわか人のこゝろはつかりなりけり
これもひつたとかは よませくにおこせみて

公忠集

こうちにたてまつれはこなたかたに侍るとさへ

日のもとのふるあともこく宮なるにしるく
これなさかりしとよめりいとけなのれはと浅なさかりしと
いふと智恵のまさいそこはいつり
まちりてほまきぬかの梅の花さへとこそ宮なるらん

東宮女御集

うちにまゐりはせし時 おはする ほそ殿 ほかれもとをまよこの
つまなとにまゐく ほひくあひひりけす
そなたもこれにはなかそうちちよとよみとこれとにはかなかれ
女御くし
神代よりけふの中ふかきとのまなあてかすりおいけるらん

松わしの社のまへ乃浜にまうて敬奉て

風ふくや神乃浜ら浪たちぬ人めさせてまちら浜まて

打わあらひ物かけるはた?とめて

清正集

いつしかとおもひみそれそ松ほとすて花たえぬさかれ

紀の国めく松のひしくるは

あかやりふれ松の下をみ?し?にて波の松ありしや

天暦乃御時の中宮乃歌合にうちふく富士の山

ちんして?りく?くさより?やのりふりれ下

よふられ?るふ

一 世の人のをしひかぬ?山あとふ?る?に?

拾遺には忠見?山乃う?れ?せまさの?

歌の詞?ら?れをく

世乃人の松ならぬ物?れ松のこ?ふ花?の?

興風集

山風に花のかさそふ?ともは春風?れ?うれん

山里は春風?さふところ?て梅?とふ?ろさく

初の?れて?の?を人れて春風?とん?を

いへり

うすくこきをいまの人と花とい見のうちに人?ら花

ゆふ日てるおかへにたてる松のはなれ鳴とかん
・おほそら月の光をあかくれ山のはゝ秋かさらなは
これハ三れ月乃明らかなるをいはんとてたそかれの
月の光なきをいつとはさらねとはしつれ山の
はれさハ西のかく 秋のよこなきまえとにさやけしと
いへる成り 古事紀云倭建命還上幸時到足
柄之坂本於食御粮処其坂神化白鹿来立尓
即以其昨遺之蒜片端待打者中其目乃殺也
故登立其坂三歎詔云阿豆麻波夜 自阿下五字以音也
故号其国謂阿豆麻也 日本紀よれハ上野雄日

山よのほりて吾妻たちとのこまふと見てしるしと
これよりハ足柄山よりのほりてはつまといふなり

是則集

思ひきえ浪なきさ磯のはなれ海てふさいかなきなかれつ
浦く磯ハ名のいまさまさりなみ信濃なるきこえ
川はなれの海へなれ海てふ海ハ天下乃
うしなはるといふ論一

小大君集

あつまのそらに行く家はちすと見てよめる
信濃路ハ武蔵の武蔵野乃たつひま あつまの国

とひとへにうきに海松ひろふや　末乃集に入る海
みな志ほのやとはせむあふこのやまにせのや
といふ歌のひるなれり
是れハ大井にて人々あまた松乃葉等ちらしよみて
ねをりつはみなよくよみあり
大井川たまさか風のふきけるにいふらの浪を見てよめる
これのことなるも人の詠む歌をたもしらぬとまく
波を見てはやきかけの世まで此哥末乃集に小
大井のたまのうへいくろくをぬるは此哥萬葉に
集には見えず此集に永観元年一条院家歌合

寝覚（?）にとよみて　ふく〳〵の花はさくとも〳〵　と見ゆ
見けるとく花の中に
大井川落葉に埋ぬ花はとそ見えぬる浪も色とそ見えれ　大井は
とあるに花散ぬるを見よはのする　からへのこゝろ
たゝとの太宮に色のきさらへりける三月に郭公の
歌で　ふかりありつきさうり花合をとふ　あかりに
なりつかのまにいれたるきこえたり
和歌をよみてや此乃郭公をきてたる　ねてわすれ
万葉第十九云
つねに人はみおきてはるとこもにしよりよくさく　初學

これもめくらけんけうとてかさくはすへし

能宣集

屏風の絵に井あるところに わたりに あまた
たちよりてくみゐんこそ けふの井をかはらすて
家筒井の月やかし まつ あまの井とのみこそはなた
はるかより出て見るかしつれのつゝかなる一つ井
こゝれ清水の名をも處ありけりやさつらん山城のそれ
此ハ名高き井戸なり一つ見れは井けれ井ともかも
井かれしけれともかん所に井よりそなす
かれ

萬葉集

我恋ハ筒井の清水とならなん影ハうつらん人もあるへく
筒井筒いつゝやかりしきなり
さ(?)見えぬ人もかくれぬさかれ(?)まほしくのこる(?)なる
拾遺集に
さ(?)とし見つめまいらぬ山川のほそ清水(?)まて(?)
右二首似たり
二首ふより今たしかに筒井の清水の言の葉もせさなとこそかん
源氏物語の玉鬘にもあまた出て物ハ井筒との
わとれりやとて 年ならしいへり 源氏物語に

よはひとく、
忘るなよ岩根の松のおほさとにたて出てやはなさんといひけれ
といふを詞にて今は人の作のはなし
あまりとてとらむすんわかの歌いと松にまる
我なりといひて見聞の詞かれや乃もいわれて出しねつかり
はなれと絵にひつらみなけ出けるひとれ御身もしらく
右二首は乃の宮たこひ法をを經詞と仍へて
年をへてたけもかくねひまつの末やいはね亡る
大嘗会の歌
・君か代は中山は志らく大嶋乃の星出かさんあかたのかき

世のとこは白山にかぎありて万代まで君そつくせん
こゝろへ代すまうにはおほ代にはへるふしたのしきれ
しらさ流を近江なる此のけたりあひさくはせは見えかれさ
これは近江なるいそらの山を蒲生郡にあり
明日香ふともかへりてはれをたちあそらとかけそめん
大かたなよすまひのかみをしとてる
流れても絶えてとをしかすかにてはなれても
武蔵野に清酒を忘れなまへらるとおもへり
宿つりの流れに人あつひの人へいしそたえて中ね
かりてきてれくねうて

思ひよらぬわれらに志らせなるかなかりけれ　ふかみくさん
のたれ侍らし
かゝのとよふ我か思ふ深ひさあるとも志らぬ人もな
張鐙法師かいはたて侍るよみけれとよめ侍るはこれをしめ
なるへし
なるとふ時よ
ひとつのはなありめとにて香はみなまよふとめ子か袖やかれ
これは和琴とひとつのをとよめ侍るなりしめかや
旅人いくあひふぬと人あひより
きゝ人はすりもはこともいふきこをやくはしねとひのよくさら

まくりは藤なるこは境又旅籠ともかいけともよ和名集
よ見えてさり山のさくらはぬすみ人をうけていふ讃馬あよい
いふとてもあはれそろとゝいひとこしおほさいふ
いふとふや
まへるぬるといふ名の池みはいろくなりまうん
思ふとふそれよつもんを名の日よおとてう
つまされ
ほかのさかすあれとんいさ海あふみつくし
わかゝぬりけりとの男乃いつていふ和歌かよめか
さしみふ人あつけくるとされ人のむとふは海つきり

せんかたなくて待けるにあたふりしえつと
申侍　　　　　　　　　　　兼盛
よそにても清き世見のかよひちはよそとはるゝともな
とはりせんかたなけ世見つへし
関すへて衣よそふれかすかのあたりをとめてもかひやなからん
うくかされ物のとふれくらわれそいてあるらては侍
足引の山さへつゝかにあまのさされわかれをそつむ
水さびく風も涼しき我宿にきとふとよそふるこまけ
離よりとすゑとへ桜のまゝすりふれりふりかたきふれり
夜のけたる涼しくなり川風いとゝ
かうとむかくやすらん

貫之集
大鏡にこのうたかきりといへり拾遺雑春に貫之
集とありて返しとよそに侍りける
　　　　　　　　　　　　　恵慶法師
ひとゝせなちよにたにあそこめられん人こそみえね秋はきにけり
返し　　　　　　　　　　　　紀時文
いにしへのちよにもたえぬ涼みあら代の世にかなのたきつき
紀時文かもとにつかはしける
　　　　　　　　　　　清原元輔
かへし昔の人の玉つさ代々にてえ花のかほれ

かはよおほつかなき事也よりも世所は須磨のことなれ
は須磨にや
さて是を須磨にて かりそけはわりなきいとまなしてうちなへん
うりそけはかりそめなり
須磨の浦の秋の風に吹てあはれなる事は須磨の浦にてなけかん
忠家業平の中納言行平の卿の流されて 其二條后の妹
給ふ
これ月のりよりはこの見えて よるひとのちかなみ 御
さてこの浦なり 茅淳といふはたちよりて 巻
ちぬたりつもたとふ 万葉集にも ちぬとは 津の國なりと

よありさつひと今もとめよわたりゆきぬ かくて
ありなり
此まへにいはとの水流れて滝はおほはらけ 多くなれり
さて万葉集雑二十は須磨遠路と読 云給ふも（金葉）
津守のまなこ須磨を
かけとめてこれのいつはりて 遠くよりもせぬ人の中なり
梅の花ちりなは須磨よりこのはのこゑりて春を待らん
海の前は梅の花の原を見るりくれ中なり梅の花もさく
いつくそや
春柳のかつらにをれは折まれはあきをはなやかにかきらん

此哥家々れをきのうちにも入らざりけるとて兼輔
今和と詠る哉新千載集并には 花をよりて
類にも拾遺集には 円融院はそれぞれのところ
とくに背文字は萬葉集のとくなど
ほとゝぎす鳴けども 志てれ行事をこそ今をはむ思ひ
此哥古今には入りてこそ今とらひいかにいかつ事よそ
とかく人をよひて詠みてこれより見出んとて
世に多く見侍
そうふうちてたびの旅行をこころみにまへ参らむ
後撰集にはこちらの哥へ思ひやる人をたぐひなく侍りし

とそうしつゝせん事とのみいはせ又もるとこれにより
今れとのみなんとよむ

多ふより侍れ捨ていかにしてもみむとおもひて侍り
此哥古今集のうちには羈旅にもいかんとや此集
の中に此哥人とはいかなる人のたちゐまゐらせ
こゝろに年の人を見てそれ分別やいとまなからん
此哥後撰に入ぬるを羈旅に入侍
ある人とかくも見るべし後もこの心をかはしてかへ
新古今に後撰大井大臣
今それ三条院の御時とも承りしを書けりける御哥

今の世ならば寺よりこそ奉られけれ花の頃りけふの九重に
春深といふはいとこの上の花をさへすかしまいらせ
見ざりける人のをかしと思ひて桜の木を寺へ帰りつ
とぞいはれし
此風よさくて此頃の上の時に八重桜の咲出て宿つとまそ出
右春深の寺は桜ちりこの上の風もまさりてといふ春の
折りのくよまれけるなり
後拾遺集
拾遺集新勅撰に天暦の御時伊勢の家集
にもあはれと見ゆく

忘れつゝ帰りける花と桜かれは見えしと花の咲見り
御返し
昔より宮の桜とのみ花はとのまさりの上ふ花の咲くつりまそく
かゝる後は此家集をしるしつけて見え春は折りの春の花
事どもまゐりけり来よりそりてこれは何とも
折りし
春の日の八重桜散りしきれ此御時の花咲きの寺の
きれいとかれの中に桜花家の寺は伊勢　新古今集は
伊勢の寺とて桜のよるに折りつれ
京の九重のふうもふる白桜八ん折りそる六十つきの

あとの明るあまる明るいわれてそてへまかんやゆく

草のかくれよあ侍るはこれなしめり
見さこねんの後らぬ人を見るもはして そらにころも
きくはなにいふかひとられ侍るは菊のたか日いと
しりなるは侍るなり
又露にそひて流れたの[illegible]ほしかねの上よ[illegible]のらん
侍るは九月九日のことなり
菊の露をわたにつつみてよるも[illegible]と色（?）[illegible]
右二首は後撰集にいれり 新古今集に[illegible]
流れしみに流すと見えたり
○ほうられこゑも成にけりけふも[illegible]

これは明時の歌なり 和歌集に大和は流る歌に 山里なり 山里歌に侍れ
世にも侍らんにも
菊枕といふは山の露を以て家の前に[illegible]
流る歌に侍り 菊の露侍るなり
侍らんにも 山里によみて ある[illegible]にて知るべし
名ゆゑにまうて侍る人の宿とふるとて[illegible]に侍りけり
後撰集に二首ともにいれり
いつも菊枕とすることひとも知らんさるらん
枕をいふにいれり 猶菊枕といふことを後撰
[illegible]旅ともなくいふあるは[illegible]にて枕し
かくつかふ[illegible]あり いはれ[illegible]

順集

しこまれ松（生）のいてゝよろつ代乃初のあるよ（たい）なかくんなれて
のんたつきよみせてまかするこゝろはしれ
たゝり
七月十五日はらからとも山寺にまうてけるに
いふのなかにわたりの蓮はなをめのなかにおほえなかり
十二月仏名せし宿に
みやま山の雲井にこれはいつ世まてのこのかなたかはるかに
ほとけの [illegible] いろいろきのふなる花あれて [illegible] なりぬる
やく本なとなん いふすや

世の中をいかにせんとかおもひつゝはれぬ [illegible] 松
志られぬなみたいつかは人のあはれとおもはん [illegible]
[illegible]
夜昔にもの [illegible] あまりとこそ [illegible] らん
[illegible]
かれりゝ [illegible] けて [illegible]
見えさるにかけ [illegible] もれとも風
皇極紀云 山背王之頭髪 班雜毛 似山羊ゟ
の文のかくかゝせてある序にみえるれきまねつさ世かり
ちくまこちなとといひてきたね道図のはる所さとまかり

志ハ七夕会かしくも出さくさへてよ志つハ我かはなよ
はなれは清かりしいふなり
天元二年十月ましめれの日右大臣家の歌合
よまれひてなりて関白兼家女房に清はれ大臣との
歌よけれとよまれはいせに清兼盛に申て弁
この歌は元輔これつくりて年兼盛の家の集
になり
[illegible]
元輔は[illegible]けれはこれをしめれ又兼盛の家の集
にあふかれはつめられてにかけるや

同しうたのゝつ歌合にまゐられ松といふことを読侍りて
ときはなる松のみとりも春くれはいまひとしほの
色まさりけり
源宗于朝臣あけれはそのうたとてしらせめて
右歌の詞は新古今集に読人しらすとせられ
元輔集
兵部卿親王のあえぬえはしめくあやまつりしけるは
[illegible]千年を松のはよはらん
すゑにも[illegible]いふ事まで子日し
侍りとて

今の世よ女の子日ことにまつ子ひきのまうけなれ
ば松つくることいふこのまきさ侍しよ
〔仮名遣違〕世の中まこと移りかはるものとなりて今なりて
さる事あるにこそはあらく侍り七日夜梅乃
を題めく
咲る梅乃梅の花ゑいふなりかはゆるとなりてん
いつよりさるとい事をとりおきすてし紛といへ
花のころなりし梅の作者なりし郷をしは
由し
梅の花いとをかしくさきに梅につけてとさきる

鶯く侍り
さく梅花にほひの色乃様ゝよは花なくなとわかきてん
りんさふは菊さは菊女黄なるを以国よは白花
と咲とは梅のへふことさよあしくさくとも如く
色ねなり
太政大臣のり女乃子を梅は咲り如年乃
さく花風をとえぬとよみて侍しよ
こなたよもみてあるは梅の所も梅風よそらふことき
那服を人乃こと世より今といふ事は本深く
わつらひく

かさもりの鶴こそ世に聞ゆれ共塩屋の名高き
これもめでたきにて元浦より
されたり
よしのは世人こぞりて花につきて愛せりしみ
すでに世すのかきはしまければ何ても物もあらぬ
藤鶴は物はりくこれを恵みりてはいめの
けり事なきもかくてよき事なり
秋風の吹くに宿こそふ松の鶴の花のもとに増せる
老の久にかゝる旅信をきて侍と申と五言をまねて
老とは萬世を祝ふは萬年とはよめり。

かくてふるき哥のおきなの言葉んすてかたきを
おもひけくいふさまといふさまを惜さいりて言をかくこそ
わりひとや人めならも山里の月とおもひ秋のあはれ
ぶ哥の名にある花の御世の御代に似たり
我がよもりぬるは花をもしふくと思ひぬらん我が様に
かゝる月の光に秋の松風ぞなりにけり
おもひとは月によりて桂川も宮この清き
なりけるうらめしく思ふをおもひたまへる所に
かりてかくなると思ひて
屏風の哥を求めるによめる

常光寺にこもり侍ける山里にいみの程こもりて侍けん
前の太政大臣なくなりける四十九日乃経すゝめ
てよみ侍ける
瀧の音に源氏の玉の露をそへて心あはれたる思ひて
玉葉集哀傷歌に枇杷太后大后宮かくれさせ給て
仏つくれる御かさりの玉を藤原保昌朝臣丹
後守にて侍ける時かさりの玉をたてまつるとて
和泉式部
数ならぬ涙の露をそへてたに玉のかさりをまさんとそ思ふ
今の世よりはるかなる今の世まてもとひ

そとはかと見えて又侍りてわつらひ
こゝろたれと見いわさと心うき侍り
紫式部か本にすゑけり山里よりとひくる神の御かへし
さねすゑの朝臣こそまかせ侍りし七夜
日の比とさらしねとくさとひぬるまゝのこのきさみ
大上天皇の子のゝしり侍しは法成寺に出させ給ひ
しよつり侍りし
君かひく子日の松はいさしらぬいつのちとせをたのまん
よとゝふ心にとりて我のしろさえまつは消そめさ
塩の色めりて身のうちにあとかへり

そゑかりけれはかはかりし女のあはれなるにおもひに
まことはかく勢たくりにたりとかはかりし[illegible]
住吉の松よりこなたに泊のなむありしかは
女のかたちいとよくしていひけるはまた住まひにいそぎけれは
ゆふくれにこれいふはてなくなくかへりけり
よみ侍りける
末の松山のなみこすならはなれは松よかけてそたのまむ
そこはかとなくよせくる年といひし[illegible]
すけるとめとてなむありしに

遠山仮字
古事記 万葉 和名 名目 等俣セリ 後世 隔テ 等年 [illegible]
[illegible]
[illegible] 今はかれ仮字多く乱雑せり [illegible] の人後世の [illegible]
[illegible] 仮字迷ひ [illegible]

もしはふるさとへ人の住まひいくとせの年をかさね
たかやまのこえをこそ清く[illegible]
わすれしに[illegible]
このへ[illegible]ことをは[illegible]すくなく[illegible]
[illegible]
これは[illegible]よ萩[illegible]
すは蘆荻とは[illegible]
仮字[illegible]
とれ[illegible]
[illegible]

信濃の浅間嶽とよめるをとこれなむ以(?)よめるは

新潟乃萩なとにあらく水のみとりにはかれよ

よみえ給へるものゝ信濃にば蔦を浅間萩と

いひなすらくよみえば浅間萩とはえよまぬやうに

なりゆけりけらし

はつかへならまゝ人のおもへるまゝによ

かくうたへる人もえせぬはふるものすべておほくの代にも衣

三月三日ていしの院にそならうと流れてくらう

え備たる和歌の文章のことなりければ

都よりそ

蔦さえ乃本よて子日に　蔦蔓は肥後に侍り

蔦蔓の岩まよ松陰松は侍りて千代の子日をとらん

千載集

其のさかりの花なりんとものに侍はこのよなりけり

うらとけても侍らぬ人をわりなくふるによりぬめく

かくのとつくもこそ残しられてあるかたよ人ゝゝ

うんとしられて

さて侍るをあれ人のことらんともいさておかなるを細字にて

後のかたまりとはまひれかたまりなりき出ひはおなしきれにおなじ

ありかたきをいひなすり

かきこそれ橋なれはとて蒼衣きるとかやとも詠かなさ
せを乃山の月乃嵐のさむくまた夜をかさぬと露霜をき
ねる女乃かは橋のそれこそね浅十月もなりぬる
佐分
橋架は夜をつなくと衣のきかはぬかさはかり
ころもえ此出谷にておもそをまつ侍るに　それ
きよりもとなくすとくおもくきえとのすらて
こふかくとよみのは人のよは橋のなりと渡るとき
とりすてゝしそれよりまゝくとてまゝしすとく

左注に撰者のうつろひといふ事能意は雑かさうの五雑になし見えし
ころまさはいたそまうし、わかりうてく宗なとりすてゝと
といひて通いは法をさ出すとい人は此れ小沙と宗とも
五せり橋のなり法橋に宗をそ見そて法まつゝし

続後撰雑上
末の世にかゝりてわけし橋もなし此書にかゝへくもなし
伝し
香をとあてこの人も春秋と花の色と法の人のかゝる香り
新葉集
桜のひまなきには小松殿にて山路に茂るなり
此頃玉葉集には続後撰とも続千載集にはなし　みな
又もとゝみて言乃法ともおなしく凉しき風とも詠ける
秦子流の御つきのようにつけかゝるもあひをそふとは
よさえなんよりかとく

すかはれそてはなくもわかれなんことをおしむいさ

金葉集

三位成弐は嵯峨少将家の大臣の御むすめなり

わかれよりうへしはてさいしやうとかへし

うそまつしまてよをへてしら人かならこゑをも

そこはれさうらくいとしかしこれそのれなりとて

かはりけもゝさされさ事をゆしきことゝふ

あわせてき御手あいは流ゆくよそへしつゝは

してうかてやまのみ

まちわひ秋こそうしかはる山やすさへつひやはおもふらん

拾遺集に云法ゆくへ侍りけるみちにかくとしの

もとふゆとうくさくもりけるふみやつゝよ侍りける

あまやすくかれつけく侍りける

まちわひ嫁このころて　かはらとも

りともとけ

霞もこきりとはかりとうりみえ

之橋の絶橋のかことたのみて　ありまし　法と

宝之の流しつへしれなとにいつまて前はふ

本橋は嫁かく宝之乃今はあそれこゝ今乃

ものはうひく　かれつけ法あや

日ハてらし残炎なをかくるれハひとよ風音もいふ庭して
むしの音ふ立かれせかし草木の露ふまつはけれは
まさみちれらふそかもれらひかたふ恋しれなそら
いれこひよ当とく
みえ代の春なふれはそをもをしとみいのてかはれひとれ
古依りれよそしとみのみやとあるしけりもの
くらひれそてみそわれハきれけれとよめは天も
聲と鳴と友すのんけり今れ音かくしらへし
又仲文かかもをとせしと行ゆへなりけりと
よめん傳も似たり

去ととは古のかゝち世にそぬをもけれハらくれかゝるけり
くら庭とわれ鈴く去と中かおゝく志るんあてねとそて志ん
昭まれしら世ゝ中よかよ冬ゝや残をる紗のかゝくよ箇
いひさして世庭かる代の海洗ん代よとひとをうすを
年こてたひしいさて当けとくらひし称もみきたけり
世乃中ハかとうへやけとさうつ花をこハむしハ去ふそてゝとれく
當れこあり残もすひとのこゝ志をわれさそ今こ乃れ
いそくらし庭れさうひよ関すつてられ物をとこてめてゐ
ゆかつまにさりてとのひかゝ衣袖乃わるふもとり
去色ハいとねをそ行ゆへつさ花もたくぬふ紀世稼てん

わくらはに松のつきくたりてこそいとふへかりけらん
枝もなくふさく波は花風にゆくとみつるを見る
空にそりふかくくれは河つらにまつしらへ亘らん
山さか川と老の川と川といふはいふはかりなく
白波の舟のさかき川を出しよりもなかしき丹波なりけり
かは河すくなりしものを霧のはなもとにわれいふかひなん
山桜ちりてもなかれこのした　見てぬ衣を着なれ
新勅撰
このさとに住みの入りふかく住みなれし松のひとつ
これよ右のうきことをもわかひとつむかしはなかりける

大嘗会主基方丹波国はなれのさとの
こゝはたまのひさかたのひかりさしそふるはなの
ひさまちは和歌集ノ独詠これをよみあはせり
つりかたなり
同方たまつくり江を
同方とはれて玉造江も
丹波なり陸奥にもあり
伝法のつく波の世におしかくいかにつくりけむ
これそのさいわいのみとり
いつもねよくふかき流白糸は今こそ絶えなれ
かへそらくとてたり浦松かすみゆけれとも
わりとよのしるし

宮と川ありて跡の名あり岩もありよりなかれて見えたる
されもうて川はいつしき川なりよせんかかりつる
とのおほきも人のさそし
宮と川跡の名あらそ人々よりねはいつしとそ云子
は宮と川は信濃なく古今集よめ侍とうなり
三月なかりよみられ名乗うはりかやかと小雨さは
てそしと侍ることところれ池とすまつりや
さいはくそしいれきさの池乃流とといつて
ものりよよ人といへいもましちく　言之　二別
ちりとすしうへは池にはねはかるはなたのひとものてそやれ

おとせとてハ名そのうなるりんこる池といふへき
和名集云陸奥国行方郡子鶴あれはなし
山風よふきしきさ乃はれハこゝ池に流れ跡よ侍ともはなそめ
こゝのはみられなりての音ふかりつて桜花れいつて
の跡たそれ雪よやとさあれし昔もみられなる
ことありなれもかれつれてそのひたくれやうく
わよりにすくるちなへ続めなりよりていふなり
なおとえせにありよれらとてうさよめりと侍り
枕進集よよ名にひこふさしとて見えたり

史人を於れこころにめぐみはわするへからすはと
なく此須しらく返さらしるつはてさこ西
天地ひらけ初て天の御子尊を神と見て治め
給ひし御代より一かたはかり風よからぬ御代はなし
はしめよりてひとのねちかはり二こころさてをさらく
小をこへいふうてうたは神代紀に
節の字をとうてと読せり
になふれ人の心をおさむるは風を命にて治しし
はこそいそかく東よりのほりき
白ほん世心よりかりいのちけくていつのこころとよいて月のかは
みやのなかにこれかくれららむ

わかそのと思ひしおもひすこてのかれの心ふかきにかかる
ならぬ人よれとさかく我身かおもはすよそにおもひぬらん
かみいててへいのくともいつかのかねとさくの山に出とよたれ

百首の中 百その初首り
出れ月のうくことなき人に何ほしてあらはと
常在ねかしもふちうちとのとけくらんと思ひりり二のれ
草を木もうこかね落ててうれしは風やなるらん
秋くれとなれとらすれはふるさまにありとも
旅風よ恋ほられは雅にはよりれ
あさちふにはさや風はさもいとかれゆく人をとへ

信濃なるいまはなにかのはしにつるまてはなにのかとて

信濃な信明朝臣

あなたのやまのはにかけたる月をみてまたいつかはとおもひつゝ

名残のこりてなかめけるまゝにけふしもかくれにけるかな

信明集

色も香もおなし昔の梅なれと人こそ人は見てもあかぬ

ほりの人のもとに

あたら夜の月と花とをおなしくは心しれらん人に見せはや

ある時人にみせんとてをきたる梅の花二葉ちりけり

おもひやる心のうちに花をこそ風にまかせて見えぬ色とや見えけん

年をへてまちえんとおもふ山のはにいつるけふの月のかけかな

はるの山をたつねてもとめしに花さかりに

康保成範法師山家集巻第一冊　慈鎮

積翠

摘題は此歌載たる書に有二首はさまれ神乃

ところにおもひて集中なり

此歌は人の名をよみける山のはにいつとも春の夜の夢の

神代よりいはひそめけるあまの雨ふる人こそみえけれ

いつはりをいひつるかきりなき我身ともしらぬかな

末の山ひとつより世をうけし花のしたにはとさしとめ

これハ中将の哥なり まつ山ハまつ山とのミよめり

えんきう集にも

まつ山の人をのこすのみ我をまつ ふかきなく

はげてみんと鈴めりしきまに続きよみより給ひぬるれ

ふさよりみんよりハ二なく二度なりけるを給ふ 六哥を

ひようのいとよしす給ととよりしたあり時の字をと

よりくとよしたととと同韻ふく通ふなるはを

あるくなり

返すよみつてうれとしておこせたれて

こひしきぶ哥と同と侍んすはそれたらし みたれて

きりり

栄花物語に ひめ宮やみかどのきさきにせさせ給はんとて 云

これはてあそれ御かとはたてまつらんとのたまはせ

ふふつきくも侍る花のいろは誰か侍らん かれ人

ゆらんせし時 蝉丸のさくら侍ふ右衛門なり

おもしろきおほつかなされ 落葉やおなしの風のはなれ

拾遺集に

落葉の枕しひしき人こそみえてあれ 人はしらぬ人あらん

狭衣に

ぞして猶中く落葉とふりやさぬめくるはすつ人もありやと

手すさひにかけたる歌やとりてもん無しき人もあらねなれ

文集送兄弟回雪夜詩云 對雪畫更使これとも
ふるきひなりおもひを わかれハ又あはねハはかねこそといふ
ちんきのなり
一 こはあく雪降に雨ふりて備までも身をおもふ歎おも行
年とおもをとふ人ハよれつ世の松とのふいハ人をそはまし
大別れといふ人の出なり雨を雪をいひ出る 大別ハ氏まで 松ハ名也
いふらしてあり行をなちぬれんふ松の出ぬすをそめわすも
寄れん出来しより人の名をよりてなり
大世德ハ長谷寺中けふりとさくらん
證歌なり。
梅心

世の中の世のあやるをしぬをはや德ハかつやうんとおもひし
元之集
鶯なつてすさめぬ住吉あるめをよりふゝはやへ我やうは
しほやめを鶯のすさめぬね年ハ行経ぬに
却花をもこそもすさめぬねおやめなかりまも人のこゑならしき
拾遺集に
春をよめくらふ今あ雨をはやめなあやしく鶯のすさめぬ行
此歌のつまて雨を徒信の躰をおもしろし古の歌
ともをかんくられさりくし又無其集に 五月菖蒲
ぬけるあ徳をこそやひろてアんく

わか二月の一日にすさみはかの葉をゑりて宮へまいりてふねにのりて
はしりたる物をさけ給ひ小舟にのりて今のまにすさみのあさの
花をおとにのこりすや思ひよりつゝかなくよみ給ひけれはなん
このしほの浦のさかなにかきてつかはし給ふ御歌ありてなみ
ならぬ物なし　まつらく
八十嶋のかみをとにいひて今そしるらんかきねなきわかみに
これもなにはのかさねとさらにはかなく涙のかはらとよみは
かなのみちに今そかなしそかのみちそこのみちにうけてくそ
よみ塩屋の浦によみ人なるなみくの物語の歌
のみかくしられけり

吾ふきてはさえのなみのあさかけにたねうちかへしなみのこえなり
六帖
いつとても秋こひさらん陸奥のあさかの沼はかりなるも
月やとるほそき汐の水さよふけてみるものうきは
中ま　六帖なれはなみのいつまてこふよなりなりたまひて
難波のさかしほふねにてはるかなるえさかにとそてくまるれ
はるとは蓬生のさわかしの世にあへる六帖
あまのすむ浦のさよふけて白浪のたちゐにみえてはかなきものか
松山にこえなるわかの浦をかれはしわするよよせく
よみ人しらす　源氏物語　蓬生に　源氏

はかなしや見るあかなくもこぼれかゝる露なれ
めしとの御顔になし
よる浪の心もとなくわかれ浦に打ちかへし人かとも　うたがひ
比べしを絶とも
朝露こぼれつるにも山郭公のひと聲も見えてねそ
庭草に吹きさふ秋風の夜中に枕にいつれともなく
夢の世の中をおもひはてゝ我と嘆かん
我とけていとふ秋のあはれにも夜もすがら寝覚めなかれん
わが為にてうき時も寝られぬ夜なく秋のせめん
六月十餘日は秋の世ちかく　いろ〳〵秋の世ちかう　めでし

こよひより初花の風の音もよし秋ぞさりぬる入なたつらん
初やたつ声もつらかりて　やるふ母のあはれそ　かゝし
つらいての涙かな
もみぢ葉ちりふす秋の涙此波の袖にくちにしも忘れぬ涙
なし
世の人の心も浮き涙といふも涙のしづくかゝるなり
人はさてなん
花もなき風もさへ身にしみぬ見てはかなくしらべそ
千歳をむかへて　はかなきと　枯れしも　おそしとはふ
ふたつのかねかなきなり

卯花の陰にかくれてなくすみか山ほとゝきすなきもせぬね
これをなそ歌といへるは志のそねみをこそ初卯花の
陰にかくれていふは述懐によめり
為兼卿の歌をもて人の心とやしも晩秋に露乃一句
新古今集に
冬の枝乃もみちをこそ袖のうへにのせてかし
これを今乃あはれとよみ出せるなり
このあはれをうたふ歌かし衣かけてこそすみれなと見えて
秋の野の花の色をこそ見えて侍れ野の露乃白露
みなれ出しなからあはれなる人の心とまことに人はちとや

嬉しとも憂しともつゐになみたは人のよそにこそこそあ
世乃うきも人の情をさへ世にすまふこそ心の内なれ
哀とは人のあはれなり
虫の音もかすれ侍らん秋深くは君か涙の露の袖にぬれ
君こそ小萩の花の露の葉を秋にふしてよ
中々けに露乃一夜のけしきあはれなる
仲文集　如何よみけん　誹諧なり
まのあはれこそはりてよめるなり　いと　るり
あくさ　あま　ありき　ひさう　むろ
いとふかき根はなきものゝはかなきひさかたむすまや

三千一字乃中に七部十八字代かへてよめるは
中ところね事なり
ぬり南の花は宮とまつかふわか世乃いろくやけよりは
[illegible]の人乃名残の月の花とまいりくらまと[illegible]
松なし
忠見集
御屏風にきのもの山に かもとこそ侍 川に 舟ゆり
霧[illegible]関の[illegible]山もこえれぬともまて花乃[illegible]り
こ[illegible]の[illegible]りあ[illegible]やなかれていなの時か[illegible]
拾遺集にこれし まにほりれかてりけるとみへて

水もなく舟をかよえぬこの[illegible]まにいろて[illegible]乃[illegible]
いろく[illegible]木乃[illegible]大井川[illegible]とも[illegible]
此歌拾遺集には そこことそいわり今乃集[illegible]人[illegible]
なりなん[illegible]集にも見へす 拾遺集とてもと人[illegible]
りひとつくへて侍るや
[illegible]とにやしぬ[illegible]てよそ[illegible]おとしそ[illegible]
[illegible]いふり代む人[illegible]年[illegible]
[illegible]乃いふ[illegible]
[illegible] 家
拾遺集に
[illegible]山[illegible]のをれ

峰ことに花のにほひのかすみかな
花の色もちりのこりけり 几

いさゝかの雪もあかさん
いさゝかの雪もあかさん 几

ふくしてつひによゆきゆきぬつき
行乞 几

梅花似たる花

梅乃花まちえしほとに咲よりも今かそへむそはなかりけると
鶯のなきてかへるを花の色のひゝきにさきしをかめの尾の山
ト人よりもまさるともかめのこゝろのおもひのはてにさかゆ
鶴とはやしき庭も梅花のにほひもちらんまつかん
いく千代ふる春の梅のさかりぬらんなりしれ君はたのめ世つ
うつふりこそ見つる花のこのえたにくはるまつ花
ちりゆくかけの雪めされははるかならく
わかれてもめくるはるなるこの春花はとまりなかるらん

六帖に

うつすはあやしき風の音のあたらしきのまつなみん
すゑのまつにしもこのつきてり
千年のまつの露をまちて秋のかれゆくへくれなん
なをよはらんかゝし待りなん

中納言敦忠

ちとせふる霜の露をまちて秋のかゝりにかはるらん
昔ゆるひし人のむかしなかりてはのしふの雨さうと
いふかとも有りつとききはけてまろをおもひてり
それは花なつかしくれなよあかし

出端さくらなかひとゝ露出は昔すみける跡こそ見えけれ
さり満れなれども山とはいかにまで
風なりし丹波山年月に移りゆきてそれとおもひなりけれ
ばうつりかはりける世のならひなり
なかはつれなき人とはなにの心年ふるほど志らぬらん
流れゆくかはらのさきもおもふのやまと西のかた日
ごとに
ひとつひとつこゝろもおなじくあはれなれど志らぬらん
いかにいはむかなしからぬかれさせぬいひなり
志らさくめはなのさくらあは(?)なりことさら(?)ありけるとぞおほし(?)

返し
年ふれどかはらでとまれさくら昔すみけむ跡ふりて
桜女が名乃んは忠見とぞいふよしとなんきく人が橘なは
ともなれ半伊勢見えけるをしきれなりける人ありける
のさきのかみのまへにおいてよめるなりとぞいひつたへたる
このさくらはのちのよまでのこりてかはらずとぞ
桜よみける歌なりけりしと新古今集新勅撰集
なりけれ橘とよめるまゝとて載せたる続集
よはさらぬこのはたゞしおもふありてものおほせけれ
津国と橘とよびて集にみえたり

まぬよこむへき年月をもて相違せるを年月せられたる
さのみまでうたへし風をあ開花の色かきむかひかりけり
かくみれば中けよはうらまつりてまたゆく處かみて
いかよへのみちさいなりつるよしきとき津かゆかと安へば
かうらやと
白露花を渡るをみてまつらんたる事はふへてまた見るにはかほし
さ拾遺抄よたのしみとをて出る　後撰集は
なし
中務集
ふるさとに渡れるかすみのはしこともおもね亭よきくる

年のをふるくいまれてと　いへる歌ゆかりて此文
みも歌書題まは定まりけり　拾遺雑かえるも
岩のを花ねよそうん歌とふはこのえまれなる名をもとを出
後撰集もこ花ところんか此所高はまさよきよ入て
はやかすむてひき後撰集にてみはそるる月日をしらぬ人の哥き
いそのかみ
いその花のうへ咲きるようにてえれは昔かくし花宿より
此歌新古今集まうへには其れ歌をとて出られ
読人不知なり
ゆうさしいへよ世まて　かきせ梅花見花もかうて歌は

浦ちかく立秋の霧はもしほ焼煙とそ見ゆなる
秋の霧は紅葉をかくすと後撰集に
例の歌あり
浦ちかく立秋霧はもしほやく煙のみこそ見えわたりけれ
紅葉をかけたるさかし山さくらかたは紅葉なりけれと云く
はつ紅葉といふ事はこの比はしめてもみつる木の葉とよめり
との紅葉はれんとやさしくとは山吹の花をも読ゆへ
人丸集にかくのみけくといへる中に紅葉もかはりゆく
ほりかれといふことめつらしきやとまありとみゆ紅葉山と
かはらぬ万葉集に古歌にみゆ此歌とよみつへり

紅葉 日本紀にも万葉集にもみえたりとよめり三代
実録にそかも川を鴨川とのこかれたるをとこそ
もみちとよくよく三輪の神乃ましますなれは
こゝろはされのことく見えつされ
白山の雪はふりはさむしともかくれ風はなさつせは
若菜は万葉集に
立田風我たつ山のまれに見えて人のたはれ
人の家よりたるたまれかたはらあらはといふ
いそつへき事はれん川波の花と浪にうれ花より
加茂の中に紅葉河よりも見えて屏風にも歌に

中宮乃ひしきの色
ひしきあいの色わ

いつもハしらせ給へと候。候く
かりにきる者まいらせ候て御
とおもひ候へとも字も参候わ
猶々申入候。かしこも[illegible]
めて候。かしく

はるぐくよめるなりいひてみるそはらんとハいふ心
とめぐるをとこれ瀬を思ふ事ありける河はの花の
やさしさをいつくしみてたのしめりてとりをとき
とりの百首に第十九にもいへる也よするうたを
こよめり古今よはるのうたハさらにとよめるも多く
はなたりさるを瀬よそへて猶あはれ我さへかく
宮の花の是るとしるとてそれ見れはあはれさう
ふとよあはれなりとみえ三浦ハたれとこゆ
おもをうはしそこのうちなも　はるの色し
中家乃ひとしをはらせふうれしよくすきよ海

迄りひし家の人徳よれたるを
それさへもせよふハ河の瀬をとのをかへしけりやる人こゝろん
世いりんてんの御中家にたてよつきをきなにひかる
のりよりして行く
白浪よそのて花蝶ハ立ぬりしことさは嵐もれはるといそすん
なそらさ花の色とすけ川をとふいろぬのさふんよすらん
こよめくもりそハ浦しき花と面へはるの風さへ秋よなる波
六位さて
玉さえ此蘂ふうけふむれ波白露も今いくよ人錦の葉ふ
中家乃浦かりし　かへるそをまひりくれくよりそをきての

されはよせと海といふとしかはくまいりせられたま
ふり
とんれと秋かせにかれをねまきて候へは風雪にはもろせ
御返し
波ねまさられとみすいまされ中さ
ほりそれ中宮のみかきれの　韻塞
夜半の忘れをまうけてたく簾のいそともあひとらはん
ことれは輪やふく山禅よ輪図ありおもこすや
むかしそれてんまさし北面よいれりの右府と
ほうらくよとれといふり　忘れはてといふことせられ

さ世給いく
代々とへてから白雪はぬれる玉をはかやうなるらん
法皇も世をから消ゆる白雪も山をのみあるかすならん
か海のかれたりと人のおこせく
かねよりいかうれ哉を思ひてたまとははねとせのゆきれ
返し
訓うかしかうおほえてい志のゆるんすとか深てふるさとや残し
ほうるれゆえそしうる梅よつせく　源仲正はなりくと　よまほことわるも
詠とい
つり
まるとく秋はやまいこねかとなれい花かとも　みちうえこそ見ゆらね

正月まちかまゝすゝきつけゝ大納言

しられぬとたのむものつけてや山のはのをかのへのまつのもとにありなん

返し

まれにくるゝ人の様にはすゝめは今年もきぬ秋やきぬらん

神さひしかみの松をみの枝て月さうをしねとのさすらく

このみの尾上にふそのにまつしさかれのまつ我もすん

返し

このみ見ぬ松をしたふめも霧のはかなしさひもしをこなゝ今そなき

松とみそはてものそのみなそねかれ今の御んなん

七月七日

はしまつのはしをまつとそなきさくもやとこ見なとかしり

ふふこそなんゝ人なきかもをしてなんこさゝ月よかとなる

そなさとさ八月のいりてなはゝてゆく

年月のやすらはもて松を原て秋たりのし人乃ん西を見て

さの様返しは須磨かはふく月のもの白秋のもつらふ

となり波の花葉をとさなり人の人乃妹のこはれ

なとはみのよらんはやすくし秋のもつらとそいひと

ふきさとや

あそふの浦は海とかひかくて恋しき波てなきを行

かひなてあり乃浦の秋風ふたへきさくてなきを行

右二首はともにれもし落しさ深く顕隠して侍り
かやうにはなかなか思はかりける事なれは付りけり
なりて哀ふかし
旅ねして物思ひ侍るよりもなにはにて露
宿しかる夜ぞと歎き夜の暁のあさほらけ
なき影をさへ我にて思ひかけすして身の程
山のはの世のなかにかくれいりても月のかくれさらまし
日をかさねつつ夜のさかりをすさましく思ふ我身をおもはね
右哥は伊勢の家の中に入たる千載集 新中
言大納言家か宗か詠るに三十六人集をさりて

近しはらく世の中に於大将御門右大臣
のうたくいかにいかにしてかれこれしつけ
らまく待り給太宰大弐家の娘の君と申す
この家もち乃筆にて入道はこれか神すや
恵見集に云へらの和讃世と申されしかり
哥ふてあるとめしはなるかなあつめて書て侍
はら
ことのもと中をよく世のなかにひさしく侍也
君か代のさかへ候とおもひやりて寄ちよを尽て
かくのとし恵見かはつめならぬへきをみつられける

かくし又云百首哥奉りし時旅人恋の哥
わけゆくや[illegible]
これよりまして[illegible]
絹乃中にいたく衆多女御の前まてと出させたまふは
初瀬乃り後拾遺集も[illegible]
語りめ御乃奉る云
まてとふかれつ[illegible]
賜答乃哥なりしに此詞今乃なすは[illegible]
よく文和ともなすや
後拾遺十九 興福寺大法師等賀天皇四

十 宝算長歌云九重能御垣之下尓常世鴈
率連天狭牡鹿乃膝折及志聞曾止言須云々常
世鴈是初歟
子日すとまへの野辺にふる[illegible]ひく人[illegible]
新続古今誹諧宣哉　中務
ゆきての[illegible]桜花わきてさきそつきせさりけり
[illegible]の葉にむすぶ露[illegible]こめてありける